

サムソン正伝

VINCENT CHEUNG

Copyright © 2025 by Vincent Cheung
<https://www.vincentcheung.com>

ACCELERATED BY BRAK

目次

1. 世は彼らにふさわしくなかった	4
2. 捕囚のパターン	9
3. 解放者の誕生	13
4. 獅子と謎	18
5. 狐とろばのあご骨	22
6. ガザの門	27
7. デリラ	31
8. 勇士の帰還	35
9. キリストの影	40

Ⅰ. 世は彼らにふさわしくなかった

サムソンという名が語られるとき、多くの人の記憶はただ一つの場面へと一気に流れていく。彼らは、デリラのひざの上に身を横たえたサムソンを思い浮かべる。情欲に倒れ、ナジル人としての聖別は笑いものに成り下がった姿である。サムソンは、力を浪費した者の戒めの物語となり、品性なきカリスマをあざけることわざとなる。教師たちはこの版の物語を繰り返し語る。力はいかに大きくても、欲望の弱さがすべてを帳消しにするのだ、と教訓が自明であるかのように。彼の生涯は、彼をたたえるためではなく、警告するためだけに書かれたかのように語られている。

このゆがめられた見方はあまりにも一般的で、多くの人はそれがゆがみであることさえほとんど自覚していない。自分は聖書の物語そのものを読んでいると思い込んでいるが、実際に吸収しているのは文化が反響させた二次的な像である。サムソンは小さな姿に縮められ、デリラのひざの上に押し込められ、彼の偉大さは失敗の影の背後に隠されてしまう。好意的であろうとする人でさえ、妥協や情熱の危険を警告するために彼に触れるだけであることが多い。

この縮小がいかに不均等に適用されているかは注目に値する。ダビデはバテシバと罪を犯し、その夫の死を画策した。しかし、彼に対する記憶はそれ一つにまで縮められてはいない。彼はいまでも、神の心になった王として、詩篇を歌った羊飼いとして、契約と王権の人として尊ばれている。彼の罪は記憶されるが、それが彼の一生全体を定義することは許されていない。ところがサムソンについては、これが逆になる。彼の信仰も、召しも、勝利も、勝利のうちに迎えた死も、一般的な語り方においてはすべてデリラにかき消されてしまうのである。

なぜサムソンはこれほど厳しく扱われるのか。その一因は、多くの読者が、自分の皮肉な見方を裏づけるものを大きくしようと好むことにある。他人の欠点をしっかりとつかんで離そうとせず、とくにその欠点が、神ご自身が与えた賜物をあざ笑っているかのように見えるときにそうなる。彼らはサムソンの中に、浪費された力を見だし、それによって自分の嘲りの本能が正当化されると感じる。しかし、その裁きが語っているのは、彼についてというより、むしろ彼ら自身についてである。彼らは、自分たちが神の道を理解していないことを露呈している。この神は欠点ある者を召し、彼らに信仰を与え、彼らを通してご自身の目的を成し遂げる。自分自身の弱さについては簡単に言い訳をする者たちが、サムソンに対しては容赦がない。彼らは神ご自身がすでに覆された判決を言い渡しているのである。

しかし、神ご自身のみことばは全く別のことを語る。ヘブル人への手紙十一章では、サムソンはギデオン、バラク、ダビデ、サムエル、そして預言者たちと同列に名を挙げられている。その章は、彼らが信仰によって王国を征服し、約束を得、獅子の口をふさぎ、剣の刃を逃れ、軍勢を打ち破った者たちだと記す。そして最後に、人間の評決を覆す一言で締めくくられる。「この世は彼らにふさわしくなかった」。サムソンは、地上で

世界が覚えているのと同じようには、天において記憶されてはいない。世界は彼をあざけるが、神は彼を尊ばれる。世界は彼を弱い者として退けるが、神は彼を信仰者の列に置かれる。

私たちはこの語句に注意を向けなければならない。これは慣用句でも、飾りの修辞でもない。ギリシア語の原文では、表現は簡潔で、しかも強調されている。この世は彼らにふさわしくなかったのである。意味はあいまいではない。世は彼らが無価値とみなし、邪魔者として扱い、荒野へ、洞窟へ、地の穴へと追いやった。世は彼らを軽蔑し、鎖につなぎ、嘲笑し、殺した。しかし、神のさばきにおいては、秤は逆転した。下にいたのは彼らではなく、世のほうであった。世の側が彼らを受け入れる資格を持たず、彼らと共に歩むことにふさわしくなく、同じ空気を吸うことにもふさわしくなかったのである。

このことの重大さは、歴史を通じて忠実な男女の系譜をたどることによって見えてくる。ノアは箱舟を建てている間、あざけられた。しかし、彼を通して世界はさばかれ、新しい創造が始まった。ヨセフは穴に投げ込まれ、奴隷として売られたが、神は彼を高く上げ、エジプトを治めさせ、命を保たせた。エリヤは「イスラエルを煩わす者」と呼ばれ、エレミヤは反逆者として投獄され、ダニエルは獅子の中に投げ込まれ、預言者たちは殺された。彼ら一人ひとりが、世からは捨てられるごみのように扱われたのである。それでも、彼らは皆、自分たちを軽んじた世よりはるかに高いところに立っていた。神の評決はすでに確定していた。「この世は彼らにふさわしくなかった」。

これをサムソンに当てはめてみよう。彼は妻に裏切られ、同胞に退けられ、敵に嘲笑され、今もなお聖書を尊ぶと称する多くの者たちから軽んじられている。しかし神は、彼をアブラハム、モーセ、ダビデと並べて置き、「この世は彼にふさわしくなかった」と宣言された。これこそが彼の価値を量る尺度である。彼を決定づけるのは、ペリシテ人の冷笑でも、現代の説教者たちの嘲りでもない。神の是認である。その是認は、軽いものではない。神が、「サムソンには欠点があるが、少しは評価されるに値する」と言っておられるのではない。神は、「サムソンはその信仰ゆえに、この世をはるかに超え出ているので、この世のほうが彼を持つに値しなかったのだ」と言っておられるのである。

神が人間の意見を覆されたのは、これが初めてではない。ノアは箱舟を建てる間ずっと嘲笑されたが、神の目には、彼はこの世を罪ありと宣告し、義を受け継ぐ者となった。ヨセフは裏切られ、売られたが、神は彼を高く上げ、治める者、命を救う者とされた。預言者たちは打たれ、投獄され、のこぎりで引き裂かれたが、この世は彼らにふさわしくなかった。同じ逆転がサムソンをも特徴づける。世は彼を見て愚か者と判断したが、神は彼を見て信仰の人と判断された。

ヘブル書のその章は、もう一つ見逃してはならない点を語る。神に認められた人々は、傷のない者ではない。モーセは荒野で神の命令に背き、約束の地に入ることを禁じられ

た。ダビデは姦淫と殺人の罪を犯し、預言者から厳しく責められた。彼らの罪は現実であり、その結果も重かった。それでも神は、彼らを信仰の列に数えたのである。彼らが神を喜ばせたのは、わざの完全さによってではなく、信仰によってであった。信仰こそが決定的なしるしである。

サムソンもまた、この列に属している。彼の罪は明白であるが、彼の信仰も真実であった。神の霊が彼の上に臨み、彼を力づけ、最後の祈りに応えられた。この記録は、彼に罪がなかったふりをするよう求めているが、同時に彼を罪によって定義することも許してはいない。彼は信仰の人であり、そのゆえに神からの承認を得たのである。

こうして、信仰が本質的な争点となる。聖書は、信仰がなければ神を喜ばせることは不可能だと言う。それは、難しいとか、起こりそうにないという程度ではなく、不可能である。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者たちに報いてくださる方であることを信じなければならない。信仰とは、神の存在と神のことばの真実に対する確信である。それは、人間の決断でも、楽観的な飛躍でもなく、神の恵みから来る賜物である。人は信仰によって、嘲笑に耐え、火に向き合い、軍勢を打ち破る。サムソンも信仰によって、獅子を引き裂き、数千人を打ち倒し、死において敵の神殿を倒した。彼の力は、単に肉体的な力ではなかった。行動のうちに現れた信仰の力であった。

だからこそ、私たちは正しい前提から出発しなければならない。もしサムソンの物語を、情欲と失墜を主題とするものだと決めつけて読むなら、一行一行を誤読することになる。私たちはあらゆる場面にデリラの影を探し、彼の偉業を信仰の行為ではなく、力の偶発的な発露として説明し、最後には、「神は同情のゆえに彼をヘブル十一章に入れたのだ」と考えるところまで行き着く。しかし、神ご自身が与えておられる前提、すなわちサムソンは信仰の人であったという前提を持って読むなら、物語は一貫性と意味をもって展開する。彼の弱さは現実であったが、それは信仰のただ中にある弱さであった。彼の勝利も現実であったが、それは神の霊による信仰の勝利であった。彼の死さえも、敗北ではなく、信仰による勝利として理解できるようになる。

前提がいかに物語をゆがめるかを見るのは難しくない。サムソンがペリシテ人の妻を望んだとき、ある者たちは、彼の動機は情欲だけだとただちに決めつける。しかし聖書は、これは主から出たことであり、主がペリシテ人に対する機会を求めておられたのだと明言している。誤った読み方では、この物語は禁じられた欲望の物語になる。正しい読み方では、神の御旨がサムソンの人生を信仰によって貫いて働いている物語となる。サムソンがろばのあご骨で千人を打ち倒したとき、ある者たちは、それを粗暴な力の物語だとみなす。正しく読むなら、それは神の霊がしもべの信仰を通して働いた出来事である。彼が生涯の終わりに祈ったとき、ある者たちは復讐の叫びだけを聞く。正しく読むなら、それは信仰の祈りであり、神がそれに答え、一つの最後の行為において彼の召しを成就されたのである。

これら二つの読み方の違いは小さくない。一方はサムソンを愚か者に引き下げ、もう一方は彼を信仰の人としてたたえる。一方は世の評決をなぞり、もう一方は神の評決に従う。この間に中立の立場は存在しない。世のゆがめた像に同意することは、神に反対することだと言ってよい。サムソンを信仰の人として擁護することは、神と共に立って世に逆らうことである。

さらに、この見方が物語全体の調子を決定することも理解しなければならない。サムソンの物語は、行き当たりばったりの偉業と失敗の連なりではない。それは、神に召され、神の力を受けた一人の人間の生涯であり、つまりきつつも信じ、人々に裁かれつつも神に認められた人生である。彼の勝利も、弱さも、失墜も、最後の勝利も、この大きな真理の一部として読まれなければならない。そこに通っている筋は、食欲でも悲劇でもない。信仰である。

そして、この視点はサムソンだけではなく、私たち自身にも語りかけている。サムソンについて「この世は彼にふさわしくなかった」と宣言した同じみことばは、あらゆる信者についても「この世は彼らにふさわしくなかった」と宣言している。キリスト者はしばしば軽蔑され、ゆがめられた像にされ、無視される。世は彼らを無関係な存在、進歩の妨げ、嘲るに値する者たちと判断する。しかし神のさばきにおいては、この世のほうに彼らにふさわしくないのである。同じ逆転がここでも働いている。キリストを信じる者たちは、ごみのように扱われることがあっても、天から見れば宝とされる。愚か者と罵られることがあっても、神は彼らを知恵ある者と呼ばれる。世の記憶の中で失敗者に縮められることがあっても、神は信仰ゆえに彼らを勝利者として覚えられる。

ここから鋭い適用が生まれる。自分をキリスト者と呼ぶ多くの人が、今もなお世のサムソン像をなぞって語っている。彼らは、彼の生涯はほとんど情欲の物語であるかのよう、デリラこそが彼を決定づけたかのように、彼の死はただの悲惨な警告にすぎないかのように話す。彼らはこうして、自分たちの本能が神のことばではなく、世の意見によって形づくられていることを示している。サムソンを軽蔑することは、神に対してペリシテ人の側につくことである。サムソンを敬うことは、世に対して神の側につくことである。中間はない。神の評決は明白である。サムソンは信仰の人であり、この世は彼にふさわしくなかった。

これはまた、慰めのことばでもある。あなたは中傷され、誤解され、ゆがめられた像に落とし込まれたことがあるかもしれない。あなたの信仰の歩みそのものが愚かさであるかのように扱われているかもしれない。あなたの人生が、一つの弱さ、一つの失敗だけでほとんど語られているかもしれない。しかし、もしあなたが神を信じているなら、この世の側があなたにふさわしくないのである。あなたを量るものは人間の記憶ではなく、神の裁きである。神ご自身が、信仰は神の承認を得るものだと宣言されており、その信仰によってあなたは世の上に立っている。

だから私たちは、サムソンを正しく考えることを学ばなければならない。彼は、一般の想像が描く悲劇的な愚か者ではないし、単なる情欲への警告でもない。彼は信仰の一人であり、神に認められた人であり、この世は彼にふさわしくなかった人である。このレンズを通して彼の生涯を読み、このレンズを通して自分自身の生涯を理解しなければならない。世は信仰を軽蔑するが、神は信仰を尊ばれる。世は信仰者をあざけるが、神はその世のほうに彼らの足もとにあると言われる。サムソンの生涯は、この評決を信じることを私たちに教えている。

2. 捕囚のパターン

サムソンの物語は勝利からではなく、闇から始まる。彼の生涯は、罪とさばきと解放が長く繰り返される一つの循環の中で立ち上がった。この循環こそ、士師の時代におけるイスラエルの歴史そのものを形作っていた。もしこの背景を理解しなければ、彼の誕生がなぜ重要であったのか、彼の召しは何を意味していたのかを理解することはできない。彼が歴史に現れたのは、イスラエルが再び偶像礼拝と圧迫の中に落ち込んだ時、神が介入された一点であった。サムソンの物語を語るためには、まずイスラエルがどのように相続財産を繰り返し浪費し、代々主を忘れ去り、神がいかに憤りと憐れみの両方をもって応じられたかを思い起こさなければならない。

士師記は、このパターンをはっきりと説明している。ヨシュアと、彼と共に主に仕えた長老たちが死んだ後、「主も主がイスラエルのために行われたみわざも知らない」新しい世代が起こった。親の失敗が、神のわざを何も知らず、その律法に従おうとしない世代を生み出したのである。彼らは主を捨て、周囲の民の神々であるバアルとアシュタロテを拝んだ。その結果、主は彼らを略奪者たちの手に渡し、彼らは奪い取られた。彼らが戦いに出るたびに、主の御手は彼らに逆らい、彼らを打ち敗られた。苦しみの中でうめき叫んだとき、神は士師たちを立てて彼らを救われた。しかしその士師が死ぬと、民はふたたび罪に戻り、しばしば以前よりも悪くなった。こうして循環は新たに始まる。

この循環は、イスラエル史にたまたま生じた異常現象ではない。反逆する国に対する神の主権的なさばきである。士師記二章は、神が敵対する諸国を地に残しておき、イスラエルを試し、彼らが神を捨てたときに罰するために用いられたことを告げている。神は懲らしめと解放の両方、捕囚と休息の両方を定められた。人間の罪は実在するが、そのすべては全能者の定めの中で展開していく。イスラエルの墮落は神の支配の外ではなく、イスラエルの解放は彼らの功績によるものでもない。彼らを敵の手に渡されたのは神であり、彼らを救い出す解放者たちを起こされたのも神である。

士師記の残りの部分も、このパターンを裏づけている。オテニエルはイスラエルをメソポタミアの圧迫から救ったが、彼が死ぬと民は偶像礼拝に戻った。エフデはモアブの王を暗殺し、八十年の平和をもたらしたが、民は再び罪に陥った。デボラとバラクはシセラを打ち破ったが、デボラがいなくなると民は再び墮落した。ギデオンはバアルの祭壇を打ち倒し、ミディアン人を打ち破ったが、彼が死ぬと民はまたもや偶像に身を売り、一つの偽りの神バアル・ベリテを拝むほどになった。エフタはイスラエルをアモン人から救ったが、彼が指導者としての務めを終えると、民は再び離反した。名前は変わっても、パターンは同じである。罪、圧迫、解放、そして再び墮落である。

この循環は重ねられるごとに、さらに暗くなっていった。オテニエルの時代は比較的忠実に見えたが、ギデオンの時代には偶像礼拝が蔓延し、ギデオン自身さえもイスラエルの罫となるエポデを作った。エフタの誓いは、国全体の霊的混乱を暴き出した。サムソンに至るころには、この下り坂が明白になっている。民は単に罪を犯していたのではな

く、異邦の支配の下に生きることに満足していた。以前の循環では、民は苦しみの中で主に叫び求めたが、ここではそのような叫びが記録されていない。この沈黙そのものが、彼らがどれほど墮落したかを示している。解放を求めて叫ぶ代わりに、彼らは支配されることを当たり前のこととして受け入れていた。

この腐敗の根底には、世代間の怠慢があった。神はイスラエルに、子どもたちに熱心にその言葉を教えるよう命じられた。家にいるときも、道を歩くときも、その言葉について話し、手に結びつけてしるしとし、額に付けて記章とし、家の門柱や門に書きしるすよう命じられた。神は過越の祭りを定められた。子どもがその意味を尋ねるとき、親が、主がどのように力ある御手をもってエジプトから救い出したかを説明するためである。神はヨルダン川の石の記念碑を命じられた。子どもがその石について尋ねるとき、親が、神がどのように水を分けられたかを思い起こして語るためである。神は律法を与え、それを新しい世代ごとにしっかり刻みつけるようはっきり命じられた。これらの儀式は空虚な形式ではない。神についての知識を生かし続け、そのみわざを家族の記憶の中に刻み込み、イスラエルという国がなぜ存在するのかを知らないまま育つ子どもが一人も出ないようにするためのものであった。

その情景を思い描くことができる。過越の食卓で子どもが「なぜ私たちはこの種なしのパンを食べるのですか」と尋ね、父親が「主が私たちを急いでエジプトから連れ出されたからだ」と答える光景である。または、子どもがヨルダンのほとりの石を指さして「これは何を意味するのですか」と尋ね、母親が「主が契約の箱の前で水をせき止められたので、私たちはかわいた地を渡ることができたのだ」と説明する光景である。信仰は本来このようにして伝えられるべきであり、偶然ではなく、意図的で計画的な教えによって伝えられるべきものであった。

しかし親たちは失敗した。彼らは儀式を行ったが、教えを怠った。儀式を中身のない殻にしてしまい、子どもたちは動作だけを知り、その背後におられる神を知らないまま成長した。奇跡を自分の目で見た世代が死ぬと、その次の世代は真理において無知となり、その無知から背教が生まれた。

同じ怠慢が今日も支配している。イエスの名を唱える親たちはしばしば、成績、スポーツ、音楽、仕事といったこの世のことには多くの力を注ぎながら、子どもに神のことばを教えない。彼らは安全、健康、お金についてはしつこく説教するが、永遠のことになると「自分で決めさせればよい」と言う。彼らはこれを自由だと主張するが、実際には見捨てているにすぎない。彼らは子どもを、娯楽、野心、自分自身といった時代の偶像の手に渡し、それに抵抗する力を与えない。その実りはイスラエルのときと同じである。主を知らない世代、周りの神々に仕える世代が生まれる。

イスラエルの怠慢は捕囚を招いた。士師記十三章は重々しいことばで始まる。「イスラエルの子らはまた主の目の前に悪を行ったので、主は彼らを四十年の間ペリシテ人の手

に渡された。」これは新しい物語ではなく、車輪がもう一度回転したにすぎない。民は罪を犯し、神はさばきを行い、今やペリシテ人が支配しているのである。

ペリシテ人は取るに足らない敵ではなかった。彼らは沿岸平原に並ぶ強力な都市国家の連合であり、戦いに長け、イスラエルがなお主として青銅に頼っていたときに鉄の使用を支配していた。彼らは自分たちの神々を傲慢に高め、イスラエルの神をあざけることを喜びとした。ペリシテ人の支配のもとに置かれるということは、軍事的に圧迫されるだけでなく、霊的に辱められることでもあった。生ける神に仕えるために選ばれた民が、偶像礼拝者たちに押しつぶされていたのである。

四十年にわたる支配は、一つの世代が束縛の中で生まれ、生き、死ぬには十分な長さであった。子どもたちが成長するとき、権威の象徴として目にするのは、イスラエルの長老ではなくペリシテ人の兵士であった。過去の解放の記憶は薄れ、代わりに敗北の文化が根づいた。イスラエルが神の民であるというアイデンティティそのものが脅かされていた。なぜなら、一つの国が長く服従状態を受け入れていると、やがて束縛を正常なことだと考え始めるからである。罪は常にそのように働く。罪は人の心をならし、捕囚を当然のことのよう感じさせ、自由を不可能なもののように思わせる。

この捕囚は神のさばきであった。聖書の記述は明白である。「主は彼らをペリシテ人の手に渡された。」ペリシテ人が台頭したのは、彼ら自身の力だけによるのではない。彼らはイスラエルの偶像礼拝に対する神の怒りの器であった。割礼なき者に支配されることは、契約を捨てたことに対する罰である。これが神のさばきの論理である。偶像にひざまずく者は、最後には偶像礼拝者の支配を受けるようになる。

士師記の循環は、イスラエルの失敗だけでなく、神の主権も示している。神は罪も、圧迫も、解放も定められた。神は敵対する諸国を地に残してイスラエルを試し、懲らしめるために用いられた。神はご自分の怒りをかき立てた反逆そのものを定められ、また民を救い出す解放者たちそのものも定められた。

イスラエルの不従順は、神の計画を中断させる出来事ではなく、その一部であった。彼らの罪は真実であり、実際にさばかれたが、その罪が起こったのは、神がそうなると決めておられたからである。神の定めは彼らの反逆と同じように、彼らの悔い改めも含んでいる。これを否定することは、イスラエルが神の支配の外に落ちることがありうると想定することであり、それは神の約束が失敗するという意味になる。聖書に啓示されている神は決して支配を失わない。神はご自分の御旨のはかりごとに従って万事を働かせておられる。

同時に、この循環は神のあわれみも示している。神には、何度も解放者たちを起こす義務はなかった。それにもかかわらず、神は繰り返しそうされた。一人一人の士師は神の真実の証しであり、たとえ神の民が契約を破っても、神がご自分の計画を捨てないことを思い起こさせるものだった。彼らの罪は神の義を示し、彼らの苦しみは神の怒りを示

し、彼らの解放は神の恵みを示した。循環全体が、神がいかなる方であるかの啓示であった。

したがって、ペリシテによる捕囚は終わりではなく、神の次の御業の舞台であった。民は自分たちを救うことができず、救いに値する者でもなかったが、神は解放者を起こされるのである。その名はサムソンであり、彼の物語は人間の側の働きかけではなく、神の定めから始まる。彼が生まれる前に、神はその到来を告げられた。彼が宿る前に、神は彼をナジル人として聖別された。彼の人生は、イスラエルの捕囚への神の答えとしてあらかじめ定められていた。

この背景は、サムソンの物語を読む私たちの姿勢を形作らなければならない。彼は孤立した英雄ではなく、歴史の中に進行する神の計画の一部であった。彼の生涯は循環の中のもう一つの回転であり、さばきのただ中における神のあわれみの新たな現れであった。彼の信仰を理解するためには、まずイスラエルの捕囚を理解しなければならない。彼が立てられたのは、民が無力で、圧迫され、主を捨てていた時である。彼の存在そのものが、神の民が不真実であっても、神ご自身が真実であり続けることの証拠であった。

この歴史は、私たちにも迫ってくる。士師記の循環は過去に閉じ込められていない。家庭も教会も今なお神のことばを軽んじており、その結果は同じである。子どもは無知のまま育ち、社会は偶像礼拝に沈み、捕囚が続く。偶像の名前は変わったが、パターンは変わっていない。金銭、権力、名声、自分自身こそが、この時代のバアルやアシュタロテである。子どもに真理を教えない親は、彼らをこれらの神々に引き渡している。世と妥協する教会は、まるごと一つの世代を闇の中へと送り込んでいる。

しかし神は不在ではない。神は今も、時代の偶像に立ち向かう信仰の人々を起こされる。神は今も、不信の循環に割り込み、そのことばを宣べ伝え、その力を示す解放者たちを起こされる。神は今も、さばきのただ中であわれみを示される。イスラエルの捕囚の教訓は、神がご自分の民をいつまでも圧迫の下に放置されることはないということである。神は解放者を送られる。サムソンの時代には、誕生前から聖別されたダン族出身の士師であった。時が満ちたとき、解放者は女から生まれた神の御子ご自身であり、その方はペリシテ人からではなく、罪と死からの解放のために来られた。

このように、イスラエルの捕囚はサムソンによる解放を理解させる準備となり、サムソンを越えて、キリストによる解放を理解させる準備となる。士師記の循環は、人間の無力と神の真実さを明らかにする。一回ごとの罪とさばきが、あわれみの舞台を整える。一回ごとの捕囚が、解放者の必要を示す。一回ごとの失敗が、救いが決して稼ぎ取るものではなく、常に神の主権的な恵みによって与えられる賜物であることを示している。

3. 解放者の誕生

参孫の物語は、イスラエルが抑えつけられている場面から始まる。民は再び主から離れ、主は再び彼らを敵の手に渡された。この繰り返しには聞き覚えがあるが、今回はその重さが一層深かった。ペリシテ人はイスラエルを短期間ではなく四十年ものあいだ踏みつけた。一つの世代が生まれ、育ち、大人になるまで、異国の支配の下で生きたのである。嗣業として約束された地は圧制者の手に握られ、聖に選ばれた民は偶像にひれ伏した。自由を失ったのは政治的な意味だけではなく、霊的な束縛の外的な現れでもあった。彼らが主を捨てたので、主は彼らを自分たちが仕えるものの支配に渡された。

しかし、この暗い状況の中で、神は新しい始まりを備えておられた。罪と圧迫の循環が永続するかのように固まったように見えた時、神は解放者の誕生を動かし始めた。主導したのは神ご自身であった。イスラエルは悔い改めず、助けを求める声も上がっていなかった。それでも契約の神は、民を崩壊の中に見捨てることはなさらなかった。さばきの中から約束を生み出し、絶望の中にいのちを告げられた。

ダンの領地にあるツオルアという町に、マノアという名の男がいた。名は記されていないが、その妻はイスラエル社会で重い悲しみとされる状態を負っていた。彼女には子がなかったのである。子どもを持たないことは個人的な悲しみであるだけでなく、公の恥でもあった。子どもは主の祝福であり、家系の継承と見なされていたからである。すでにペリシテの勢力に押されていたダン族の家にとって、不妊という現実はいすラエル民族そのものの無力と虚しさを映しているようであった。

しかし、救済史において不妊はしばしば、神が力を示される場となった。人間の力では命を生み出せない胎は、神の御旨が実現する舞台となった。サラは約束を聞いて笑ったが、やがてイサクが生まれた。リベカは長い歳月を待ち、ヤコブとエサウを産んだ。ハンナは主の前に魂を注ぎ出し、サムエルを受けた。老いたエリサベツは主の道を備えるヨハネを身ごもった。これらの誕生はどれも救済史の転換点であり、自然の力によって起こったのではなく、神が語られ、その言葉が成就したからである。マノアの妻もこの流れの中にあっ

た。不妊は肉体の状態だけを意味しない。それは、神の介入なしには人間の力がどれほど無力であることを示している。神が働かれなければ、アブラハムの家系を通る約束の系譜は進まず、神がハンナの祈りに応えなければ王国は始まらず、老いた夫婦にヨハネが生まれなければキリストの道も準備されなかった。これらの転換点は同じ真理を強調している。贖いは人間の意志や血筋からではなく、神の力から進むのである。参孫の誕生もその一つのしるしであった。イスラエルの救いは軍事改革や民族覚醒から生じるのではなく、空虚の中にいのちを語る神から生じるのである。

ある日、主の使いがマノアの妻に現れた。彼女は幻を求めたのでもなく、しるしを求めたのでもなかったが、天が彼女の無名の生活に突如介入した。使いは告げた。「あなた

は不妊で子を産んだことがないが、あなたはみごもって男の子を産むであろう。」その瞬間、不可能は覆された。彼女の空虚という状態は、神の命令の前に退いた。イスラエルの救いは軍事的天才や民族的立ち上がりからではなく、存在しないところにいのちを創造する神の言葉から生まれるのだ。

さらに使いは指示を与えた。彼女はぶどう酒も強い酒も飲まず、不浄の物を食べてはならなかった。胎内にいる時から、子はナジル人として主にささげられるからである。イスラエルでは、ナジル人の誓いは通常、自発的で一時的なものであった。男女が特定の期間、主にささげられるために、ぶどう酒を断ち、死体に触れず、髪を切らずに捧げることを選んだ。しかし参孫の場合、その奉献は彼自身が選んだものではなく、期間も限られていなかった。誕生前から神によって定められ、その言葉で封印され、墓に至るまで続いた。彼の一生は神の目的のために区別されたのである。母親の食事さえも誓いの下に置かれた。彼女がその子を宿す以上、その奉献を分かち持つことになったからである。

これは、聖さが人の選択から始まるのではなく、神の任命から始まることを示していた。参孫は自分で神に属することを決めたのではない。神が彼を取られたのである。この奉献は、来る救いがイスラエルの功績ではなく神の働きであることを示すしるしであった。聖さは個人を越えて家を形づくり、生活を変える。マノアの妻も、宿す子のゆえに自分の習慣を変えなければならなかった。主はご自身のための僕を区別され、その周囲にまでその召しの重みが及んだ。

ナジル人の誓いには深い意味があった。ぶどう酒を断つことは、喜びが神からのみ来ることを待ち望む者として生きることを示した。死体に触れないことは、生ける神の前に生き、腐敗に触れない生活を示した。髪を伸ばし続けることは、絶えない分離のしるしを身に帯び、だれの目にも明らかにすることであった。大抵のナジル人にとって、これらは一時的な献身の象徴にすぎなかったが、参孫にとっては存在そのものを定義するものとなった。彼は受胎の時から死ぬ時まで、聖なる務めのために神に取られたのである。

妻からの報告を聞いたマノアは、さらに導きを求めて祈った。「主よ、どうかあなたが遣わされた神の人をもう一度来させ、これから生まれる子をどう扱うべきかを教えてください。」その願いは聞き届けられ、使いは再び現れた。マノアは尋ねた。「あなたの言葉が成就するとき、この子はどのように生き、どのような使命を持つのでしょうか。」使いは答えた。「私は彼女に命じたすべてのことを、彼女に守らせなさい。」新しい指示は何も与えられなかった。すでに語られた言葉が十分であった。

神がすでに明確に語られたのに、人はさらに多くを求める。確証を欲しがすが、道は隠されていない。神の言葉の中に開かれている。求められているのは、果てしない探求ではなく従順である。マノアが必要としたのは、新しい啓示ではなく、語られた言葉に従う信仰であった。今日の親たちも同じ誘惑に陥る。彼らは子どもの育て方に「秘密の導

き」を求めながら、聖書の明確な命令を無視する。主はすでに語っておられる。主の言葉を熱心に教え、真理の中で子どもを訓練し、主の懲らしめと教えによって育てよと。書かれたものを無視しながら新しい光を求めることは、本質を完全に取り違えることである。

マノアは来客を食事に招いた。しかし使いは答えた。「私はあなたの食物を食べない。もし焼き尽くすいけにえを備えるなら、それを主にささげなさい。」マノアはまだ、そこに立つ者が誰であるか理解していなかったなので、名を尋ねた。答えはこうであった。「なぜ私の名を尋ねるのか。それは不思議である。」

マノアは若いやぎと穀物の供え物を取り、岩の上に置いた。火が祭壇から天に向かって上ったとき、主の使いはその火の中に上っていった。マノアと彼の妻はすぐに地に伏した。その瞬間、彼らは訪れた者の偉大さを悟った。震えながらマノアは言った。「私たちは必ず死ぬ。私たちは神を見たのだから。」妻は答えた。「もし主が私たちを殺そうとされたのなら、焼き尽くすいけにえを受け入れはしなかったでしょうし、これらのことを示しもせず、まして私たちにこのように語られることもなかったでしょう。」

この出来事は、単なる使者以上の存在を示していた。被造物の天使は、決していけにえを受け取らない。後に人々が幻の中で天使にひれ伏した時、天使はそれを拒み、ただ神のみを礼拝するよう命じた。しかしここでは、使いはいけにえを受け取り、その火の中に上り、彼らの礼拝を受けたのである。彼の名は「不思議」であり、それは後にイザヤがメシアを指して「不思議な助言者、力ある神」と呼ぶときに用いる言葉であった。本文は彼を、目に見える形で現れた神ご自身として示している。受肉以前に現れた永遠の御言葉である。彼は参孫の誕生を告げるだけでなく、ご自身の来臨をも予告していた。

マノアと妻の対照は際立っていた。彼は死を恐れて震えた。彼女は与えられた恵みから推論した。彼は栄光を見てさばきを思い、彼女は約束を思い起こして好意を結論づけた。信仰は魂を安定させ、啓示を脅威ではなく賜物として理解する。神が滅ぼすつもりなら、いけにえを受け取ることも、これらの事を示すことも、子を約束することもなかったはずだという彼女の推論は正しかった。その瞬間、彼女の信仰は夫の恐れより強かった。

時が満ちると、彼女は男の子を産み、彼を参孫と名づけた。「太陽のような」という意味で、まるでイスラエルの夜に一筋の光が差し込んだかのようにであった。子は成長し、主の祝福を受けた。そしてツオルアとエシュタオルの間のダンの陣営で、主の霊が彼を動かし始めた。

この動きは、彼の力づけの始まりを示していた。参孫の召しは異例であり、その力は体格や訓練や性質からではなく、主の霊が彼の上に臨むことから生じた。幼い時から最後の行動に至るまで、彼の奉獻と勝利は霊の働きであった。後に彼が獅子を引き裂き、綱を断ち、敵を打ち倒した時、それは自然の力ではなく神の力であった。さらには、彼の

軽率な選択でさえ、神の目的を進める手段となった。ダンの陣営で始まったこの動きは、彼が人間の能力を超えた働きのために神に選り分けられたことを示していた。

聖霊がどのように彼を動かしたのか、本文は記さない。ただ、聖霊が確かに彼を動かしたと言うのみである。それは、内側で力が煮え立ち、現れる時を待つ衝動や促しを思わせる言葉であった。まだ行動の時は来ていないが、神に動かされている若者の姿である。イスラエルは参孫が何をするかまだ知らなかったが、歴史はすでに動き出していた。神はご自身の器を準備し始めておられた。

神が召される時、必ず備えを与えられる。僕を呼んで空手のまま送り出すことは決してなさない。神は務めに応じて御霊による力を与えられる。参孫は並外れた力を与えられ、イスラエルの他の者たちはそれぞれの務めに適した知恵、技術、預言の言葉を満たされた。だがキリストにおいて、御霊はすべての信者に注がれた。参孫を動かした同じ御霊が今やすべてのキリスト者の内に住んでいる。それも部分的ではなく、満ちあふれるかたちである。病を癒し、悪霊を追い出し、大胆に福音を宣べ伝え、しるしを行うことは、信じる者たちに伴う。参孫の生涯に見られた特別な力は、教会全体の共有の財産となったのである。

親は、自分の子に神がどんな務めを備えているのか具体的には知らないかもしれない。しかし、主を知り、御言葉を信頼し、神が与える務めに備えられるよう育てなければならない。召しの時が来れば、御霊が力を与えられる。真の成功は、自然の能力ではなく御霊の働きの上に築かれる。私たちの十分さは自分からではなく、神から来る。

参孫の誕生と奉献は、それ自体がさらに先を示していた。彼の生涯はキリストに向かって伸びる影であった。参孫の誕生は天使によって告げられ、キリストも同じであった。参孫は受胎の時から奉献されたが、キリストの聖さは絶対で罪がなかった。参孫は御霊によって力を受けたが、キリストは限りなく御霊を受けられた。参孫は救いを「始める」ために立てられ、キリストは救いを「成し遂げる」ために来られた。

マノアは神を見たために死を恐れたが、数世紀後、神は肉となって来られ、人が神を見ても生きることができるようになった。参孫が不妊の母から生まれたことは、自然の不可能が神の力によって覆された処女降誕を前もって示していた。参孫の奉献がイスラエル史の中の使命に捧げられたのに対し、キリストの聖さは永遠で本質的で完全であった。参孫が御霊の力でペリシテ人を打ったように、キリストの御霊による務めは悪魔の業を破壊した。

この比較によって焦点がはっきりする。参孫の物語は真の解放者の舞台を整えるものであった。ツォルアでの誕生は、ベツレヘムに向かう一歩であった。どちらも天の使いによって告げられ、どちらも暗闇の時代に起こった。どちらも救いが人間の努力ではなく神の働きであることを示していた。参孫はイスラエルの流れを変え始めたが、キリスト

は信じるすべての者に勝利を確立された。参孫の救いは部分的かつ一時的であったが、キリストの救いは完全で永遠である。前者は影、後者は実体であった。

イスラエルは依然としてペリシテ人の支配の下にあり、偶像礼拝も地に満ちていた。しかし参孫の誕生とともに、夜明けは差し込んだ。胎内から奉献され、御霊に満たされ、神の言葉自らによって告げられた子が歴史に現れたのである。神は解放者を起こされた。束縛の潮流が永遠に続くことはない。

4. 獅子と謎

サムソンはティムナへ下って行き、そこで若いペリシテ人の女を見た。帰って来ると、父と母に言った。「ティムナでペリシテ人の女を見ました。どうか彼女を私の妻として迎えてください。」父母は言った。「あなたの親族の娘たちの中に、また私たちの民の中にふさわしい者はいないのですか。なぜ受け皮を持たないペリシテ人のところへ妻を求めて行くのですか。」しかしサムソンは言った。「彼女を迎えてください。私の目にかなっています。」父母は、この事が主から出たものであり、主がペリシテ人に対する機会を求めておられたことを知らなかった。その時ペリシテ人はイスラエルを支配していた。

サムソンの最初の選択は父母への侮辱であり、神の律法に対する違反であった。イスラエルの民は、息子や娘を異邦の民に与えてはならなかった。偶像礼拝へ引き込まれる危険があったからである。父母はこれをよく理解していた。ペリシテ人との通婚は望ましくないだけでなく禁じられていた。母の胎にいる時から奉献され、神の誓いによって印を付けられた息子がこのような願いを口にしたことを、両親は信じ難かった。反対は小さな誇りからではなく、神の民が分離された存在であるべきだという確信からだった。しかしサムソンは押し通した。物語の語り手が知らせるように、この出来事全体が主から出たということに、彼らは気づかなかった。主は、まさにこの罪と愚かさの道を通して、ペリシテ人との最初の衝突を起こすことを定めておられた。

ここで物語は、神の主権と向き合うことを迫る。神の命令に照らせばサムソンの要求は罪であったが、神の永遠の計画の中では定められた事柄であった。神の定めは万事を含み、人の罪さえ含む。他方、神の命令は義が求めるものを示す。両者は同じではない。サムソンは命令を破り、罪責を負ったが、同時に定めを成就し、神の目的はそれによって前進した。責任は神が割り当てる場所に残る。神が行動を定めておられたからといってサムソンは無罪を主張できず、その行為を罪とされたからといって神が不正を問われることもない。すべては神から出ているが、人は責任を負い、神ご自身が裁きを行われる。

サムソンと父母との緊張は、多くの信徒が経験する葛藤を描き出す。子が聖書に逆らう道を固執する時、親は嘆く。人生に対する神の召しを主張し、親に反発する子もいる。どちらも信仰の試練である。不信者との結婚を追い求める子を見て、神の言葉への忠実さから反対する親もいる。逆に、神への奉仕を志す子を見て、恐れのために引き止めてしまう親もいる。状況は違っても、どちらも心を暴き出す。サムソンの父母の反対は正しかった。神の命令は明白だった。しかし彼らは、サムソンの罪を用いてペリシテ人への裁きを生み出すという神の定めを見抜けなかった。罪と愚かさの表面だけを見ていた。神は、その背後で展開する目的を見ておられた。

サムソンは父母と共にティムナへ下った。ぶどう畑に来た時、彼は父母と離れていたが、一頭の若い獅子は突然、激しい咆哮と共に襲いかかった。獅子は予兆もなく飛びかか

り、その叫びは空気を裂き恐怖を走らせた。その瞬間、主の霊が激しく彼に臨み、人間を超える力を満たした。手には武器がなかったが、彼は獅子をつかみ引き裂いた。攻撃は始まると同時に終わった。死すべきはずの出来事は、彼の上にある力の最初の徴となった。しかしサムソンは、父母のどちらにもこれを語らなかった。ぶどう畑で何が起こったのか、彼らは知らず、神の霊が息子を通して行ったことを見なかった。

しばらくして、彼は女を迎えるため戻って来た。好奇心から、獅子の倒れていた場所に立ち寄った。日差しが骨を乾かし、屍は殻のように縮んでいた。しかしその中に蜂の群れが巣を作り、蜜が輝いていた。彼は身をかがめ、手で掬い取り、歩きながら食べた。甘さは舌に豊かに広がった。父母にも与え、彼らも食べたが、蜜の出所は語らなかった。

勝利は一転して罪となった。ナジル人の誓いは胎にある時から彼を印づけていた。ぶどう酒は禁止され、かみそりは禁止され、死体も禁止されていた。しかし彼は屍の上にかがみ込み、聖別された手を差し入れ、死から出た甘味を口にした。神が触れてはならないと言われたものに触れ、聖とされたものを平凡に扱った。父母は蜜を食べたが、自分たちが汚れに加わったことを知らなかった。源を知っていたのはサムソンだけだった。誓いが汚されたのは血ではなく無関心によるものだった。

サムソンは力のために霊を信頼したが、神への畏れは示さなかった。聖さとは信仰と畏れが共に備わることである。主を恐れることは知恵の初めであり、それが欠ければ愚かさが増す。屍から出た蜜はまだ彼を滅ぼすものではなかったが、先に起こる事のしるしであった。イスラエルの民も同じことをしていた。甘いものを求めるように偶像を追いかけ、罪の一時の快楽に欺かれ、聖なる民への召しを忘れていた。サムソンはその歴史の縮図であった。死を平然と触れた彼の行為は、偶像への軽率な傾きを映し出していた。蜜は死から生まれ、甘く見えても初めから汚れていた。

こうしてサムソンは女と話し、彼女は彼の目にかなった。父は婚礼を整え、サムソンは新郎の慣習に従って宴を催した。三十人の仲間が彼に付けられ、彼らはペリシテ人であり、見知らぬ者たちが婚礼の仲間に押し込まれた。広間には笑い声と誇りの言葉が満ち、酒が流れ、遊戯が始まった。祝宴の空気の下には隠れた敵意があった。招かれた者たちは友ではなく、疑いの目で彼を観察し、力を測り、辱める機会を狙っていた。

騒ぎの中で、サムソンは立ち上がって言った。「今、あなたがたに謎をかけましょう。この宴の七日の間に答えを言い当てれば、亜麻布三十着と衣服三十着を与えましょう。できなければ、あなたがたが同じものを私に与えなければなりません。」彼らは勝負を喜んで受けた。そこで彼は言った。「食らう者から食べ物が生まれ、強い者から甘いものが生まれた。」三日間、彼らは知恵を絞ったが解けなかった。

賭けは遊び以上のものだった。亜麻布と衣服は身分と富を示した。謎には名誉も財産も賭けられていた。しかし誰も答えられなかった。秘密はサムソンの個人的な勝利に隠れ

ていた。誇りは苛立ちへ、苛成ちは怒りへ変わった。四日目、彼らは追い詰められ、脅しと暴力でサムソンの妻のもとへ行った。「夫から答えを聞き出せ。さもなくばお前と父の家を火で焼く。私たちを呼んだのは財産を奪うためだったのか。」

女は涙をもってサムソンのもとに来了。「あなたは私を憎んでいます。愛していません。私の民に謎をかけておきながら、答えを教えてくださいません。」声は非難で震え、涙があふれた。サムソンは答えた。「父にも母にも話していません。どうしてあなたに話す必要があるのですか。」しかし彼女は迫り続けた。宴の毎日、彼女は泣き続け、夜ごとに責めた。彼女の言葉はサムソンをすり減らした。獅子を手で裂く男でありながら、彼女の涙の持続には耐えられなかった。獣を打ち倒した力があっても、彼女の執拗さに打ち負けた。

彼女の涙は無垢ではなかった。それは彼女の忠誠を縛る者たちが握らせた道具だった。弱さに見えたものは策略であり、サムソンを摩耗させるための計算された圧力だった。操作は悪質であり、蛇がエバを欺き、彼女の言葉を通してアダムを破滅に押しやった時と同じである。同じ型がティムナで再び現れた。サムソンは獅子を裂いたが、嘆願と非難の絶え間ない攻撃には抵抗しなかった。獣の咆哮にはひるまなかったのに、敵についた者の止むことのない言葉には屈した。サムソンを倒したのはペリシテ人の力ではなく、その言葉の継続的な圧力であった。

ついに彼は答えを語った。秘密は彼の唇から彼女の耳へ、彼女の耳から彼女の民へと流れた。七日目、太陽が沈む前に、伴友たちは得意げに言った。「蜜より甘いものは何か。獅子より強いものは何か。」

サムソンの怒りは燃え上がった。答えが盗まれ、妻が裏切ったことを知っていた。彼は言った。「もしあなたがたが私の子牛で耕さなかったら、この謎は解けなかったはずだ。」その言葉は妻を侮辱し、敵にくびきを負わされた獣のように嘲るものだった。しかし負債は残っていた。主の霊が再び激しく彼に臨み、怒りの行き先を与えた。彼はアシュケロンへ下り、三十人を撃ち殺し、衣服をはぎ取り、答えを言い当てた者たちに持って来た。裏切りの代価は血で支払われた。

怒りに燃えたまま、サムソンは父の家へ帰った。妻は彼の伴友の一人に与えられ、まるで彼が夫ではなかったかのようであった。婚姻は始まる前に崩れた。本来喜びの結びつきであるはずのものが、怒りと死と裏切りに終わった。

こうして彼の最初の一連の出来事が終わった。力と弱さ、勝利と愚かさが渦巻いていた。霊によって獅子を殺す力を与えられたが、甘味に誘惑されて誓いを汚した。謎でペリシテ人を惑わせたが、涙に押され秘密を漏らした。怒りに任せ三十人を殺しながら、妻を失った。どの場面でも、神の目的はサムソンの従順によってではなく、彼の巻き込まれた事々を通して進んでいった。

物語は整った道徳的教訓を提示しない。ただ、生まれながら奉献され、力を与えられながら、聖さに無頓着で、操作に弱い一人の男の生涯が描かれる。神の力への自信は失わなかったが、そこには神の聖さへの無謀な無視が伴っていた。イスラエルの救いは軍勢を率いることで始まらず、争いに踏み込み、その一つ一つが神によってペリシテ人への裁きへ変えられた。

主の霊がサムソンに臨むと、彼は獅子も人も裂いた。しかし同じ人物が、女の嘆願、屍の蜜、自分の軽率な怒りで打ち倒された。力と弱さが隣り合い、信仰と愚かさが共に歩んだ。そのすべてを通して神の定めは揺らがなかった。イスラエルの救い主は勝利ではなく混乱の中で働きを始めた。

物語は、このように歴史を書かれる神と向き合うことを迫る。神は獅子も蜜も、謎も裏切りも、勝利も恥も定められる。サムソンは聖さの模範ではなく、信仰が認められた者である。彼の信仰は完全ではなく、生涯は模範的でなかったが、神はそれを数えられた。欠けある力によって始まった救いは、完全に奉献され、神への畏れが純粹で、力が決して衰えることのない、より大きな救い主を指し示していた。

サムソンは怒りに燃えてティムナを去り、誓いは傷つき、婚姻は失われ、敵は倒れ、彼は父の家へ歩いて戻った。しかしペリシテ人はすでに最初の一撃を受けていた。収穫は焼かれ、戦士たちは倒れ、領主たちは霊の力を帯びた男の前で震えることになる。物語はまだ始まったばかりだが、その時点ですでに、弱さと絡み合う信仰、破れた人間を通して働く神の力、誰も選ばない方法で救いをもたらされる神の姿が形を取り始めていた。

5. 狐とろばのあご骨

しばらくして、麦の刈り入れの時期になり、サムソンは若いやぎを携えてティムナへ戻り、妻に会おうとした。彼は妻の父に、妻の部屋に入るつもりだと言ったが、その男は彼を入れようとしなかった。婚宴での混乱のあと、サムソンが娘を憎んだと思い込み、彼女をサムソンの友人に与えてしまっていたのだった。侮辱を和らげようとして、男は代わりに妹を差し出し、しかも彼女のほうが美しいとまで言った。

これは屈辱の場面だった。妻に裏切られた怒りの中で婚宴を去り、その怒りの勢いでアシュケロンのペリシテ人を討ち倒したあのサムソンであったが、今は怒りも静まり、和解の意思を示す贈り物を携えて戻ってきた。しかし彼が受け取ったのは拒絶だった。妻は奪われ、名誉は傷つき、結婚の神聖さは都合に合わせて踏みにじられた。サムソンの贈り物も望みも、戸口ではねつけられた。

彼の返答は諦めではなかった。「今回は、おれがペリシテ人に害を与えても罪ではない。必ず彼らに損害を与える。」彼はそう宣言した。これは復讐の言葉であったが、その奥には神の定めがあった。最初から天使は、サムソンがイスラエルをペリシテ人の手から救い始めると告げていた。神はイスラエルの敵に立ち向かうことを決めており、そのためにサムソンの生涯を選んでいて。彼が受けた個人的侮辱は、国全体への裁きの火花となったのである。家族間の争いのように見えたものは、実際には神の戦いであった。

サムソンは出て行き、三百匹の狐を捕らえた。その労力は計り知れないほど大きかったが、彼を奮い立たせた霊が知恵と力を与えた。彼は狐を尾と尾で結び合わせ、間にたいまつを結びつけて火をつけ、畑へ放った。刈り入れは整い、穂は高く乾ききっていた。ぶどう畑の房は重く垂れ、オリーブ畑も収穫を待っていた。その豊かな地に、狐たちは火を引きずりながら狂ったように走り回った。炎は畑一面に広がり、麦もぶどうもオリーブも、一晩で焼き尽くされた。作物を救おうと駆けつけた農夫たちは、あちこちで跳ね散る火の粉に囲まれた。煙の匂い、燃え落ちる穂の音、絶望の叫びが地を満たした。豊かさは飢饉へと変わり、夜の風は焼け落ちた畑の轟きを運んだ。

これはペリシテ人の力の根本への復讐であった。彼らの富は崩れ、土地の実りへの自信も灰となった。彼らの神々は守ることができなかった。イスラエルの神は軍勢ではなく、獣を用いて火を放たれた。攻城兵器ではなく、尾に結びつけたたいまつを使われた。この裁きは彼らの誇りをあざ笑った。彼らの信頼は脆くもろいものとして暴かれた。

ペリシテ人は収穫を繁栄の証として誇っていた。穀物に満ちた畑、あふれる酒槽。それが彼らの支配の象徴だった。しかし炎が広がると、その富は一夜で煙と化した。豊かさを頼みにしていた農夫たちは、焼け焦げた大地を掘り返し、倉が灰と化すのを見つめるしかなかった。これは単なる物質的損失ではなく、神々の前での屈辱であった。ダゴンは彼らの収穫を救えず、偶像も火を止められなかった。彼らの宗教は無力、誇りは空虚

であった。主は一人の怒りと三百匹の狐を用いて彼らを裸にし、人の手の実りが神の前に立ち得ないことを示した。

神が国々に立ち向かわれるとき、いつもこのようである。人が誇る力に頼って敵を倒すことはなさない。神は畑を走る狐で帝国を倒すことができる。昆虫で経済を揺らし、雹で軍勢を砕き、夢で王を揺さぶる。小さく、軽んじられるものを取り、それを武器とされる。人間の力は神の前に立ち続けることはできない。

ペリシテ人は誰がこのことをしたのか問いただし、ティムナ人の娘を奪われたサムソンだと聞かされた。彼らの復讐は、その女と父に向かった。彼らは二人を火で焼き殺した。それはかつて婚宴でサムソンを裏切ったとき、その女が恐れていた結末であった。彼女は妥協して命を守ろうとしたが、裏切りは救いにならなかった。彼女が屈した脅しが彼女を焼き尽くした。

彼女の妥協は無益だった。ペリシテ人に屈して身を守ろうとし、夫を裏切って命を繋ごうとしたが、守ろうとしたものすべてを失った。その誤った計算は火で終わった。真理を安全と引き換えにする者は、皆この道を行く。不信と共に生き延びようとすることは、逃れようとする破滅そのものを抱き締めることである。安全は神とその油注がれた者への忠実の中にしか存在しない。

サムソンの怒りはさらに激しく燃え上がった。「お前たちがこんなことをした以上、報復せずには済まさない。」その言葉は血の誓いを帯びており、彼はそれを果たした。彼は出撃し、多くのペリシテ人を撃ち殺した。聖書はその襲撃を凶暴で容赦のないものとして描く。ここでも、個人的復讐のように見えるものが、実は神の目的の器であることが明らかになる。サムソンの動機には怒り、悲しみ、侮辱が混じっていたが、その背後には神の御心があった。主はまさにこの働きのために彼を立てられたのである。

その後、サムソンはエタムの岩の洞穴に退いた。しかしそれは一時的な退却だった。ペリシテ人は彼を制圧しようと決意し、ユダに進軍してリヒの近くに陣を敷いた。ユダはこれを見て震え上がった。サムソンのもとに結集する代わりに、主人をなだめに走った。三千人のユダ人が洞穴へ下りてきたが、それは救い主と共に立つためではなく、彼を縛るためであった。

彼らの言葉は心を暴いた。「ペリシテ人が我々を支配していることが分からないのか。」彼らは圧政を当然の秩序として受け入れていた。抵抗こそ罪であるかのようにサムソンを責め、信仰を愚かさとして扱った。これは慎重さではなく臆病であり、外交ではなく不信であった。彼らは神よりも圧制者を恐れた。鎖の安定を自由の危険より好んだ。三千という人数は、恥を拡大したにすぎなかった。体の多さは力の幻影を与えたが、その言葉は魂が空虚であることを示していた。彼らは軍隊となれたはずなのに、自らの救い主の看守となることを選んだ。

三千人が一人を縛るその姿は、本来、彼ら自身にとっても醜悪であるはずだった。救い主を縛る縄を握りながら、彼らは自分たちが「現実的」であると思っていた。彼らの頭の中では、平和を守っているつもりだった。実際には、自分たちの命綱を敵に渡していたのである。ユダの恥は、ペリシテ人への恐れだけでなく、神への盲目にもあった。彼らは鎖を信仰より、秩序を勇氣より、生き延びることを名誉より選んだ。彼らが慎重と呼んだものは天への反逆であった。彼らが縛ったその人こそ、神が鎖を断つために立てた人であったが、自分たちの力でその人を縄に押し込めたのである。その瞬間、彼らの不信はペリシテ人の脅しより雄弁であった。

神が立てた救い主は、自分の民によって引き渡された。三千人が、彼らを救える唯一の人を縛った。彼らは自分たちの手で殺さないと約束したが、ペリシテ人の手に渡した。自分で打つことは恐れながら、死に渡すことは恐れなかった。対比は鮮烈である。信仰の人は一人、臆病者は三千。これがイスラエルにおける不信の姿である。民がモーセに不平を言ったときも、預言者たちを退けたときも、キリストを十字架に引き渡したときも、同じことであった。神の救い主を拒むこと、それが反逆の印である。

今も同じ不信は姿を現す。信仰、癒し、奇跡を語る者に反発する不信の人々は、ちょうどサムソンに反対したユダのようである。彼らは神よりも嘲笑を恐れ、天の救いより世の承認を重んじる。彼らの「慎重」は裏切りであり、彼らの「分別」は反逆である。神の力を運ぶ者と共に立つ代わりに、彼らは疑いと言葉で縛り上げ、蔑みへと差し出す。不信の本能は変わっていない。救い主を問題扱いし、降伏を解決策として差し出すのである。

サムソンが縛られたままペリシテ人のもとへ引かれていくとき、主の霊が彼の上に激しく臨んだ。縄は焼けた麻のようにちぎれた。彼は手近にあった新しいろばのあご骨をつかみ、それで千人を打ち殺した。想像してほしい。粗末な骨を手に、一人の男が兵士の列に立ちはだかり、次々と打ち倒していく。その場は動きの嵐であり、武器の金属音は骨が頭蓋に当たる鈍い音によってかき消された。人々は人の数に自信を持って突撃してくるが、そのたびに死が待っていた。土埃が舞い、地面は血でぬかるんだ。

神は弱さを通して救うことを喜ばれる。その僕の手にあるろばのあご骨は、敵の剣より重い。力は神に属し、武器にも、人の数にも、策略にも属さない。神への信仰が十分なのである。ユダが信じなかったことを、サムソンは実際に示した。神と共にある一人は十分である。

虐殺が終わると、サムソンは勝利の言葉を口にした。「ろばのあご骨で、彼らを山のようになりしめた。ろばのあご骨で、千人を殺した。」それは嘲りの言葉であり、敗れた者を笑いものにする響きだった。彼は屍の上で笑った。神が彼らの力を愚かにされたからである。

しかしその後、渴きが襲った。勝利は一転して危機となった。サムソンは主に叫んだ。「あなたはこの偉大な勝利をしもべに与えられました。なのに、私を渴きで死なせ、割礼のない者の手に落とされるのですか。」彼の祈りには信仰と愚かさが混じっていた。力の源は神だと信じつつも、不満の調子で、敬意を欠き、まるで神が生き延びる義務を負うかのように語ったのである。信仰は「当然の権利」と同じではないが、当然と思い込むことは、不信よりはましである。

神は応えられた。主はリヒのくぼんだ場所を裂き、水を湧き出させた。サムソンは飲み、力を取り戻し、息を吹き返した。神はサムソンの信仰を尊ばれた。それが自己中心的思いに混じっていたとしても、信仰は信仰であり、神はこれを喜ばれる。主は消えかけた燈心を消されない。しかしこの祈りは同時にサムソンの欠点をも示していた。彼は神の力を信頼したが、神の聖さを恐れなかった。自信はあったが、畏れはなかった。この神への畏れの欠如が、彼の性格における致命的な裂け目であった。

ユダの裏切りとリヒでの勝利は、多くの人が好んで繰り返す嘘を暴く。それは、「力はチームにあり、集団にあり、誰も一人で立つべきではない」という主張である。彼らは「共同体の霊性」や「教会出席」や「チーム事工」を高く掲げ、人数が成功を保証するかのよう語る。神と一人の人で足りるという真理を否定するのである。これは知恵に見える不信である。

三千人のユダ人は、霊に満たされた一人のサムソンの前では無価値だった。信仰がないゆえに、彼らの「チーム」はチームですらなかった。臆病者の群れは役に立つどころか有害である。彼らは自らの希望を担う男をみずから差し出した。人数の多さこそ彼らの恥であった。

今日の多くの教会も同じである。出席そのものを重んじ、自分たちのネットワークや運動を誇る。しかし信仰がなければ、群衆は空虚である。一人で涙を流すエレミヤは、多数の偽預言者よりよほど優れている。権力者の前に一人で立つパウロは、妥協する評議会より価値がある。信仰は神に休み、人数に休まない。

神はしばしば一人の男を通して働かれる。世界中が嘲笑する中でノアは信じ、アブラハムはすべてを捨てよとの召しを聞いて従った。エリヤはカルメル山でバアルの預言者たちに一人で立ち向かった。エレミヤは国が彼に背いたときも、一人で語り続けた。パウロは言った。「最初の弁明のとき、だれも私のそばに立たなかった。しかし主が私のかたわらに立ち、力を与えられた。」神の力は人数に頼らない。神は弱いものを選んで強いものを恥じ入らせ、卑しいものや軽んじられるものを選んで、人間の誇りを打ち消される。

これは交わりが無価値だという意味ではない。協力が不要だという意味でもない。キリストの体は真実であり、神は多くの者に賜物を授けられる。しかし人数に依存する信仰は愚かである。互いに寄りかかり、神だけに寄りかからないとき、そこには信仰は存在

しない。そのとき教会はサムソンを縛ったユダとなる。チームワークが偶像になると、互いの承認が真の信仰とすり替わり、偽りの安全感しかもたらさない。企業的礼拝や集団事工を崇拝する傾向は、聖書よりむしろ世俗の理論に根ざしている。聖書が教えるのは神への依存であり、群衆への依存ではない。

サムソンのリヒでの勝利は、この偽りへの叱責である。民に縛られ、武器はろばのあご骨一つ。それでも彼は千人を殺した。彼の力は霊から来たのであり、人数からでも仲間からでもチームからでもない。今日の多くの教会と同じく、そこにいた群衆は信仰のない者ばかりであり、そこに「共同礼拝」は存在せず、あるのは集団的な妥協と反逆だけだった。神への信仰だけが十分だった。だからこそ、ヘブル書は彼を「信仰によって外国の軍勢を打ち破った者」として記憶するのである。

神はサムソンの祈りに応え、水を与えられた。三千人の臆病なユダが救い主を裏切り、神と共にある一人が軍勢を打ち破ったことを暴露された。神はろばのあご骨でペリシテ人を打ち、彼らの誇りが世の軽蔑するものの前に立ち得ないことを示された。そして、権利意識に染まりながらも信仰をもって叫んだサムソンを聞かれた。神はいつも信仰を喜ばれ、ご自身の召しと約束に忠実であるからである。狐とろばのあご骨の物語は、単なる暴力ではなく、不信に対する信仰、弱さを通して現れる神の力、そして欠点を抱えながら信じる者への神の憐れみと真実の物語である。

サムソンは二十年間イスラエルをさばいた。彼の生涯にはむらがあったが、信仰は本物だった。彼は民が立とうとしなかった場所に立ち、恐れに屈した民とは違い、神の力を信頼した。そのゆえに彼は記憶される。畑を焼いた狐、軍勢を打ち倒したあご骨、くぼみから湧き出た水。それらすべてが、神が信仰を通して働かれることを証しする。世はこのような者にはふさわしくなかった。

6. ガザの門

レヒでの大虐殺の後、サムソンの人生はすぐに新たな、そして決定的な場面へ移った。彼はイスラエルで幾年もさばきを行い、ペリシテ人には恐れられ、その指導者たちには憎まれ、自分の同胞からも辛うじて受け入れられていた。物語はここでガザへと向かう。ガザはペリシテ人の主要な都市の一つで、海岸近くに立ち、堅固な城壁と門が安全を象徴していた。五つの主要都市のうち最も南に位置し、エジプトから来る交易路を見張る哨所のような役割を担い、イスラエルに対して力と反抗を示す都市であった。商業と富で知られ、権力と誇りが集まる場所であり、ペリシテ人にとっては自らの支配を象徴する要塞であった。ガザを打つことは、彼らの支配の中心を打つことに等しかった。この都市へサムソンは入っていき、物語もその暗闇へと読者を引き込んでいく。

サムソンはガザへ下り、ある遊女を見つけ、そのもとに入った。説明は何もない。記述はそれを柔らげず、弁解も与えない。ただ彼の罪を名指しするのみである。ティムナのように、婚姻の形を取った契約の外観すら存在しない。これは放縦であり、生々しく、ナジル人としてふさわしくない行為であった。生まれた時から神に捧げられ、特別に選り出された男が、ただ売られるためだけに身を差し出す女の床に入ったのである。聖別された者が凡庸になり、救うべき者が罪の中に避難所を求めた。これは自らの召しに無頓着な者の証であった。

サムソンはガザへ下ったが、それはこれまでで最も深くペリシテの領域へ踏み込んだことであった。彼らの都市に入ること自体が失敗なのではない。彼の使命は敵の要塞に赴き、対峙することを含んでいたからである。恥は、戦いのためではなく、放縦のためにガザへ入ったことにあった。敵の誇りを打ち砕く代わりに、彼は遊女を求めた。本来ならさばきの舞台となるべき場所が、妥協の舞台となった。神の告知のもとで育ち、生まれる前から聖別されていた男が、自分の誓いを無意味なもののように扱った。イスラエルを救うために選ばれた者が、敵の中心で自らを汚したのである。彼の罪は、神を捨て偶像に向かったイスラエル全体の不忠を映し出していた。民が虚偽の礼拝に身を委ねたように、彼らの救い手もガザの遊女に身を委ねた。これは深刻な辱めであり、彼の召しとの対比は誰の目にも明らかであった。

それでもサムソンはガザにいた。ガザは混乱に包まれた。「サムソンが来た」という知らせが瞬く間に広がった。その名は恐れと怒りをかき立てるのに十分であった。彼はペリシテ人の災厄であり、狐で畑を焼き尽くし、ろばの骨で彼らを打ち倒し、その力を嘲笑った男であった。彼が城門の内側にいるということは、悪夢が街路に横たわっているようなものであった。今度こそ、彼らは思った。ついに捕らえたのだと。街は彼を囲み、門は固く閉ざされた。夜明けになれば、彼を捕らえ、イスラエルの救い手は滅ぼされるはずだった。

彼らはすぐに襲いかからなかった。以前に見た力を恐れたのかもしれない。あるいは、忍耐のほうが得策だと考えたのかもしれない。「夜通し眠らせておけ。朝日が昇る時、

待ち伏せの力をすべてぶつけられよう。」計画は確実に見えた。朝になれば敵は縛られるか死ぬかであり、ガザは勝利を誇れるはずだった。その夜の笑いや囁きは期待で満ちていたはずだ。サムソンを民の前に引き出し、ペリシテを恐怖に陥れた男が鎖につながれた姿を誇示することを想像していた。しかしその自信は無知の上に成り立っていた。主の霊を城壁が閉じ込められるはずがなかった。

しかしサムソンは夜明けまで待たなかった。真夜中に彼は起き上がった。彼の心中について聖書は何も語らないが、その時刻がすでに意味を示している。危険が濃くなる場所にとどまることはしなかった。彼は夜へ歩み出たが、忍び出たのではなかった。敵が自分を捕らえたと思っていた城門へ向かって歩いた。そしてそこで、神の霊抜きには誰もできないことを成し遂げた。

ガザの門は手で押して開くような扉ではなかった。木と金属で巨大に組まれ、城壁に深く差し込まれた柱に固定されていた。古代世界において城門は都市防衛の誇りであった。火にも攻城兵器にも耐えるように厚く重く作られ、鉄の横木で留められ、門で締められ、見張り台で補強されていた。ペリシテ人の力、その防衛の誇り、都市が破られ得ないという象徴であった。このような門は、多くの兵士が必要なほどの重さと構造を持ち、軍を相手に耐えるために造られた。しかしサムソンがそこに来た時、彼はそれを根こそぎ引き抜いた。柱も横木も扉もすべて、肩に担ぎ上げた。ペリシテ人が安全のために信頼していたものは、神の力に依り頼む一人の男によって、一瞬で奪い去られた。

彼は逃げるためだけに門を脇へ置いたわけではなかった。それを遠くへ運び、三、四十里ほどの距離を越えて、ヘブロンに面した山にまで担ぎ上げた。道のりは長く険しかったが、神の力が彼を支えた。ガザの誇りと防御は一夜にして取り去られた。イスラエルの敵はさらし者となり、要塞は嘲られ、その力は辱められた。これは、どれほど堅固でも、神の力を受けた者に対して立ち得る都市はないという神の宣言であった。

物語の本文では数節しか割かれていないが、その意味は計り知れない。サムソンはその夜罪を犯し、その罪は現実であった。遊女のもとに行ったことは誓いへの反逆であった。しかし同じ夜、彼は信仰によって行動し、その信仰もまた現実であった。軍隊ではなく自らの手でガザの力に立ち向かったのは、神の霊が彼を支えると信じたからであった。罪は彼のものであり、力は神のものであった。どちらも真実であり、どちらも同時に起こり、どちらも主の御手のもとにあった。人は罪ある者であったが、力を与えた神は栄光を受けた。

朝になればペリシテ人は激怒したはずである。待ち伏せは辱めに変わり、彼らの力は嘲られ、城門は敵の地で戦利品としてさらされた。彼らが恐れる士師は健在であり、神は彼と共にあった。神が立てた救い手に対して、どの要塞も立ち得なかった。もしサムソンがガザの門を担ぎ去ることができるなら、どの敵が城壁の内側に安全を見いだせるというのか。

門は単なる扉ではない。安全の象徴であり、安全と危険の境界であり、都市の力の標識である。それを失うことは、敵の前に裸でさらされることに等しい。ガザは一夜にして門を失った。攻囲戦でもなく、軍でもなく、神に力を受けた一人の男によってであった。まるで神ご自身が防御に手を伸ばし、それを無効にしたかのようにであった。この辱めは完全であった。誰もガザの城壁を見て、そこに開いた欠落と恥を意識しない者はいない。強さを誇った都市は弱さを露わにされ、イスラエル全体がその徴を見た。

サムソン自身にとって、この夜は警告であり励ましでもあった。罪は免除されなかったが、彼は生きて去った。召しを汚したが、神はなお彼を守った。罪は人を辱め、破滅へ向かわせる。遊女のもとへ行った愚かさは、放置されればやがて彼を滅ぼしたのであろう。妥協の一つ一つが救い手を束縛へと近づけるのである。ガザは終わりではなかったが、終わりが近いという徴であった。力は残っていたが、弱さは深まっていた。

しかし真夜中に現れた信仰は賞賛された。サムソンは城門を担ぎ上げるとき、神の力を信頼した。臆病者のように逃げず、哀願することもなく、敵の誇りの中心へ歩み寄り、それを引き抜いた。人は彼を批判するが、聖書はそうしない。千万人が集まったとしても、誓いを破ったサムソン一人の信仰と技量に及ばない。罪があったとしても、彼の信仰は批判者すべてを超えていた。後に聖書は彼の名を信じた者の中に記している。彼が征服したのは、自らの力ではなく、神の力を信じたからである。生涯は妥協に染まっていたが、彼は信仰者として記憶され、世界は彼にふさわしくなかったのである。

罪は重荷である。たとえ神がなお働かれるとしても、ガザの遊女の出来事は彼の人生の汚点として残った。召しを辱め、聖別に背いた。もし彼があの時悔い改めていたなら、物語は違うものになっていたかもしれない。しかし彼は進み続け、妥協はさらに深くなった。この物語は、神の計画は私たちの聖さに依存しないが、罪には結果が伴うことを教える。ガザの門は神の力の徴であったが、ガザの床はサムソンの弱さの徴として残った。

ペリシテ人は自分たちの罠が確実だと思っていた。彼らは彼を囲み、勝利を確信していた。しかしサムソンが真夜中に起き上がった時、その計画は覆された。信仰の人が行動し、神の力が彼を証しした。敵に囲まれる時には、神を信頼して立ち上がるのである。神の力は人の計画を愚かにし、人の思い込みを破壊する。サムソンは、欠けのある人間であっても信仰は勝利をもたらすことを示した。神は信じる者を通してご自身の力を現すことを喜ばれる。

この物語はさらに偉大な出来事を示す。サムソンは門を山へ運び、ガザに対する勝利を示した。しかしキリストは死の門そのものを打ち砕いた。サムソンの行為は敵への見せしめと辱めであったが、キリストの行為は民への永遠の救いであった。サムソンは肩に木と鉄を担い、キリストは十字架で罪の呪いを負われた。サムソンはガザを辱め、キリストは死を廃し、命と不朽を照らし出した。ヘブロンを望む山は徴であったが、カルバリは成就であった。

サムソンの不完全な信仰は、キリストの完全な信仰を指し示している。サムソンがヘブロンの山へ担い上げたものを、キリストは人々の救いのためにゴルゴタへ担われた。サムソンが一時敵を嘲ったのに対し、キリストは永遠にすべての敵に勝利した。ガザが朝に目覚めて城門の消失を見たように、世界は三日目の朝、墓の石が取り除かれたことを見た。ガザの門は根こそぎ引き抜かれ、死の門は完全に打ち砕かれた。サムソンが一つの都市を辱めたように、キリストは最後の敵を滅ぼした。イスラエルの士師が一夜鉄を担い、栄光の主は終わりまで罪を担われた。

物語は途切れることなくソレクの谷へ移る。そこにはデリラが待っている。しかしガザの門は記念碑のように残り続ける。それは、サムソンが生まれながらに聖別されながら誓いを軽んじ、罪に負われながらも信仰によって特徴づけられた人物であることを示す。それは神が力をもって支配し、守りのうちに憐れみを示し、目的を成就するうえで忠実であることを示す。それは信仰が不可能に対して踏み出し、神の力によって勝利すること、そして罪が神の僕を墮落させ、弱くし、破滅へと引き寄せることを示す。

サムソンは力を保ったままガザを去ったが、物語は彼の没落の準備を進めていた。彼の信仰はなお真実であったが、罪もまた働いていた。彼の力は敵を辱めたが、妥協は間もなく彼を敵の手に渡すことになるだろう。ガザは同じ夜に勝利であり、警告でもあった。門はヘブロンへ運ばれたが、デリラの影はすでに頁の上に広がっていた。

7. デリラ

参孫はガザの城門を肩に担ぎ、丘の上に運んで置いた。非リシテ人たちは、屈服させることのできない男が自分たちの城の防備を嘲り、力を恥に変えるのを怒りに満ちて見つめていた。彼は罫をものともせず歩み去り、なおもナジル人であり、なおも霊の力を帯び、なおも彼らの軍勢の恐怖であった。しかし物語がガザからソレクの谷へと移る時、記録は力の偉業から、ゆっくりと進む誘惑の働きへと移り変わる。参孫は力によって非リシテの町々を辱めてきたが、今やその心は銀で買うことのできる忠誠を持つ女の腕へと引き寄せられていった。

ソレクの谷は肥沃で水に恵まれ、イスラエルと非リシテの領地の間に横たわっていた。そこで彼はデリラに出会い、本文はただ「彼は彼女を愛した」と記すだけである。それはガザの娼婦との一時的な放縦ではなかった。彼の愛情は彼女に落ち着き、人生は彼女の存在を中心に回り始めた。かつて非リシテ人の畑を焼き、その兵士たちを殺した男が、やがて自分を裏切る女の膝に安らごうとしていた。戦いでは激しかった彼の心は、彼女に対して柔らかくなっていった。その愛情は命取りとなる盲目に導いた。愛が神への献身から切り離される時、それは高い代価を要求する偶像となる。

非リシテの首長たちは機会を見た。彼らはデリラのもとに来て、彼女に提案を置いた。参孫の力の秘密を探り、彼を自分たちの手に渡すなら、各首長が銀千百シェケルを与えるというのだ。その額は莫大で、彼女に計り知れぬ富をもたらすに十分であった。これは、民の怒りに脅されて従わざるを得なかったティムナの女の場合とは違った。デリラを動かしたのは恐れではなく、貪欲であった。彼女はイスラエルで最も強い男の愛情を、銀と引き換えにしようとした。かつて参孫を崩したのも裏切りであったが、今回の裏切りは生き延びるためではなく、利益のための冷たい裏切りであった。

デリラは少しの時間も無駄にしなかった。彼女は率直に尋ねた。「あなたの大いなる力の秘密と、どうすればあなたを縛り、征服できるのか教えてください。」その言葉自体が、彼を驚かせてしかるべきであった。女が害を企む時、男は多くの場合言われずとも察する。しかし参孫は彼女のもとから立ち去らず、絆を断ちもしなかった。彼は彼女の要求を弄び、自分なりの策略で答えた。七本のまだ乾いていない新しい腱で縛られれば、他の男のように弱くなると告げた。彼女はその意図を隠さなかった。彼女はその腱で彼を縛り、男たちは伏兵として潜んだ。彼女が「参孫よ、非リシテ人があなたに！」と叫ぶと、彼は腱を、火に近づけられた糸のように断ち切った。

その時彼は悟った。彼女の問いかけは戯れではなかった。彼女は彼の言葉を試し、彼は自分の力が依然としてあることを示した。彼はその場を立ち去ることもできた。危険を危険として見ることもできた。しかし彼は留まり、彼女は再び迫った。「あなたは私を笑いものにした。嘘をついた。どうすればあなたを縛れるのか教えて。」彼は新しい縄なら自分を拘束できると答えた。彼女が試すたびに、彼はまた自由になった。

試みが繰り返されるたび、証拠は積み上がった。彼女が尋ね、彼は偽り答え、彼女はその言葉に従い、彼は束縛を引きちぎった。このような繰り返しの中で、無知を弁解することのできる男はいない。参孫は無知ではなかった。放縦であった。裏切りと知りながらそれを容認した。彼は彼女の策略を遊びのように扱い、離れようともせず、真実を語ろうともせず、危険に向き合おうともしなかった。非リシテ人が軍隊では縛れなかった男を、デリラはその執念で縛った。

デリラの意図が繰り返し明らかになってもなお、参孫が彼女のもとに留まったことは、人の魂の一部にある傷が、他の部分の明晰さに勝つことがあると示している。彼は彼女の裏切りを見逃してはいなかった。縄を見、叫びを聞き、伏兵の気配を感じていた。それでも彼は留まった。拒絶による傷で心が既に深く刻まれていた彼は、どんな代価を払っても伴侶を求めたのかもしれない。彼は親に誤解され、最初の妻に裏切られ、同胞に引き渡された。再び捨てられることは死より苦しいと感じたかもしれない。だから彼は愛情を求めるあまり裏切りを容認した。千軍万馬に一人で立ち向かった勇士が、愛の中で一人になることは耐えられなかった。

このような放縦は、参孫の信仰が真実であったにもかかわらず、不注意によって歪められていたことを示す。彼はいつものように神の力に頼ったが、自分を神の僕として区別した奉献を軽く扱った。霊の力への確信は信仰そのものであったが、神の聖さへの恐れがなければそれは向こう見ずなものとなる。彼を滅ぼしたのは、彼女の策略を知らなかったからではなく、自分の召しの重大さを顧みなかったからであった。

この欠陥は、彼の人生全体を走る裂け目のようであった。彼は獅子にも軍勢にも恐れず立ち向かったが、日々繰り返される言葉には屈した。ティムナでも、妻は涙で迫り、謎の答えを明かさない彼を「自分を憎んでいる」と責めた。彼女は彼を疲れ果てさせ、ついに秘密を引き出し、敵は勝利した。デリラも同じ武器を使った。「どうして『愛している』と言いながら、私に心を打ち明けないのですか。あなたは私を笑いものにした。」この非難は鋭く、彼の最も弱い部分を突いた。彼は城門で兵士を退けることはできたが、彼女を愛していないという含みには耐えられなかった。「愛」という言葉そのものが、彼を滅ぼす道具となった。

悪魔はしばしばこの方法を選んできた。暴力が失敗しても、言葉による持続的な圧力は軍勢でも成し得ないことを成し遂げる。蛇はエバを押し、神の命令をねじ曲げて疑いを不従順へと変えた。エバはアダムに迫り、彼は欺かれていなかったのに従った。デリラは参孫に迫り、彼は意図を知らずに従った。計算された圧力で繰り返される言葉は、鎖よりも強く人を縛る罠となる。操作は悪しき霊の道具であり、神を求める心より平安を求める心が勝るなら、いずれ人は止まない声に屈服してしまう。

こうして彼女は日ごとに迫り、参孫を疲れ果てさせた。聖書はここで重々しい簡潔さをもって語る。「彼の魂は死ぬほど悩まされた。」彼は彼女の要求を弄び、半ば真実半ば偽りの答えを織り交ぜてはいたが、彼女のそばを離れなかった。彼の失敗は突然ではな

く、妥協の積み重ね、逃げようとしないう姿勢の積み重ねであった。ついに疲労が勝った時、彼は真実を語った。

「私の頭には今までかみそりが触れたことがない。私は胎内にいた時から神にささげられたナジル人だからだ。もし頭を剃られれば力は離れ、他の男のように弱くなる。」彼は筋肉や訓練ではなく、奉獻について語った。彼の髪は誓いの印であり、神の命令に根ざした召しの外的なしるしであった。その印を差し出すことは、奉獻の聖さを踏みにじることであった。力は常に主の霊から来ていたが、霊は奉獻の印と共に働いていた。これを明かした時、参孫は自分を神に捧げた印そのものを軽んじたのである。

では、なぜ神は参孫の力を髪と結びつけたのか。その印自体に自然の力はなかった。軍勢を倒したのはケラチンの繊維ではなく、神の霊であった。切られていない髪は証しであり、彼の人生が神の召しに結びついていることを示す可視の記憶であった。力と象徴を共に置くことで、神はイスラエルに奉獻が抽象概念ではないことを教えた。誓いは具体的な生活として体現され、人々の前に示されなければならなかった。髪を剃ることは、これを命じた神を侮る行為であった。参孫がこれをデリラに明かした時、彼は単に秘密を漏らしただけではなく、聖なる印を侮ったのであった。この侮りは髪を失う以上に彼の破滅の道を開いた。

デリラは、彼が心を開いたとすぐに悟った。彼女は非リシテの首長たちに使いを送り、再び来るよう促した。彼らは銀を手に戻ってきた。彼女は参孫を膝の上で眠らせた。信頼の姿勢は裏切りの場となった。彼が眠る間に、ある男が七本の髪の房を剃り、ナジル人の奉獻の象徴は落ちた。彼女は再び叫んだ。「参孫よ、非リシテ人があなたに！」

彼は目覚め、いつものように立ち上がろうと考えた。戦うため、縄を断つため、アシュケロンでもレヒでもそうしたように立とうとした。しかし彼は知らなかった。主が彼から離れていたことを。戦いの時に彼に臨んだ霊は退いた。力は消えた。髪が力を持っていたのではなく、神の臨在が取り去られたのであった。神の賜物を当然視していた参孫は、自らの僭越の代価をついに知った。

参孫の悲劇は、キリストの奉獻と比べるとさらに鮮明になる。二人とも生まれる前から愛され、救いのために選ばれ、銀で裏切られた。しかし参孫が屈したところで、キリストは耐えた。悪魔は荒野でイエスに迫ったが、イエスは聖書で答えた。敵は園で迫ったが、イエスは激しく祈った。告発者たちはピラトの前で迫ったが、イエスは告白を揺るがせなかった。死の脅しにも、執拗な言葉にも屈服しなかった。参孫は一人の女のしつこさに倒れたが、キリストは地獄の激怒のすべてに勝利した。この物語は、信仰の系譜においてすべての救い手が弱さを示した一方で、真の救い主だけが揺るがなかったことを見るための備えとなる。

非リシテ人は参孫を捕らえた。彼らは彼の目をえぐり、かつて百人単位で敵が倒れるのを見た男が、もはや何も見えないようにした。彼らは青銅の鎖で彼を縛り、ガザの牢獄

で穀物を挽く家畜のような働きをさせた。かつて彼らの収穫を焼いた男が、今や彼らの石臼を回す者となった。力は失われ、視力は失われ、自由は失われ、軍勢の恐怖であった男が彼らの奴隷となった。

これが参孫の墮落の深さである。戦場で倒されたのではなく、妥協によって崩れた。軍勢の力ではなく、操作の持続によって崩れた。彼は神の力に頼ったが、神の聖さを恐れたことはなかった。神への敬意なしに奉献を軽んじるなら、奉献を失った時、霊が去ったことを知ることになる。

物語は厳しい真理を示す。最も強い外面的な賜物であっても、奉献を侮る生き方を支えることはできない。勇気があり、才能があり、成功があっても、神への恐れがなければそれらは僭越の燃料になる。参孫は信仰を持っていたため、聖書は彼を神に喜ばれた者として記す。しかし彼には敬虔が欠け、そのために辱めを受けた。敬虔のない信仰は行動を大胆にするが、献身を怠らせる。真の献身はこの二つを一つに結びつける。

参孫の盲目は肉体以上のものであった。それは彼が長年生きてきた内的盲目の外的なしるしであった。彼は神の力を見たが、神の聖さを見なかった。霊の力を見たが、誓いの重大さを見なかった。戦う敵を見たが、容認した罫を見なかった。彼の目は人によって奪われたが、その視界はずっと以前から愚かさに曇っていた。

しかし物語はここで終わらない。彼が胎にある前から彼を区別した神は、自らの目的を捨てていなかった。彼の頭の髪は再び伸び始め、奉献の印が戻ってきた。牢獄で、盲い、縛られた参孫は、自由の中で決して理解しなかったことを学ぶことになる。神は侮られないということ、そして神の召しは軽んじられるべきものではないということ。恥への転落は、彼の遺産を決定づける信仰の行為への道を備えるものとなった。

今のところ、物語は彼をガザで穀物を挽く姿に留めている。敵に嘲られ、愛した者に裏切られ、力を奪われ、視力を奪われた彼。墮落は完全であったが、その荒廃の中にも神の手は消えていなかった。恥を通して、信仰が再び語るための舞台が整えられた。僭越によって崩れた男は、沈黙の思索と祈りによって回復される男となる。しかし回復の前に、記録はしばらく彼の墮落の闇に留まる。奉献を侮ればどうなるのか、操作の言葉に屈し、神の召しに固くとどまらない者にどのような破滅が訪れるのかを、私たちに見せるためである。

8. 勇士の帰還

ペリシテ人は参孫を捕らえ、彼の両目をえぐり取り、青銅の枷で縛りつけた。彼らは彼をガザへ連れて行き、牢獄で穀物を挽かせた。かつて獅子を引き裂き、軍勢を散らした男は、ついに獣の労働へと落とされた。野で彼に対抗できなかった者たちが、今や鎖につながれた彼を嘲笑した。彼らは参孫の力が断たれ、彼の物語が終わったと思い込んだ。参孫が大袈の偉大さを示す証拠であるかのように、彼らは誇らしげに引き回した。

ガザはペリシテ人の主要都市であり、誇りと力の象徴であった。参孫は、戦利品ののようにそこへ引きずられて行った。かつて彼はこの町の巨大な城門を肩に担いで去り、彼らの要塞の中心で恥をかかせた。だが今、同じ町は、彼が失明し、枷につながれ、挽き臼の前で身をかがめている姿を見て歓声を上げた。かつて彼らを震え上がらせた男が、牛のように引かれ、果てしなく回り続けて穀物を挽いている。彼がガザで収めた勝利の記憶はまだ新しかったが、その光景によって消し去られたかのようにであった。

牢獄での毎日は、失われたものを突きつけた。参孫は石臼の軋む音を聞き、顔にかかる粉の埃を感じ、闇の中でつまずいた。その循環は終わりなく続き、まるで彼の人生全体が虚無へと縮められたかのようにであった。それは、神に仕えるよう召されながら偶像に縛られ、むなしく働くイスラエルそのものの姿であった。参孫の捕縛は個人の恥辱であるだけでなく、国の恥辱でもあった。イスラエルは、彼らを救い始めた士師の失墜を聞き、今や囚人として生きる彼の姿を知ったであろう。ガザで嘲られる参孫の姿を見ることは、彼ら自身の状態が映し返されるのを見ることでもあった。

恥辱は参孫一人にとどまらなかった。彼の敗北は、イスラエルの神の敗北と見なされた。ペリシテ人はそう理解し、勝利を大袈に帰した。彼らにとって参孫の失明は、単なる一人の男の弱さではなく、イスラエルの信仰の崩壊であった。救い主の倒れたことは、偶像の勝利であるかのように思われた。彼らの嘲笑は、参孫に向けられると同時に、天にも向けられていた。

だがイスラエルの神は、参孫を見捨ててはいなかった。万物を治める方は、この破滅さえも御心の目的に従わせた。ペリシテ人は参孫を辱めるために生かしておいたが、その命を奪わなかったことによって、自らの滅びの器を温存したのである。彼らは彼に鎖をかけたが、鎖は神の御旨を縛ることはできなかった。彼らは彼を盲目にしたが、参孫はむしろその時こそ最もよく見ていた。召しを終わらせたかに見えた苦難は、彼を人生最大の信仰行為へと置いた。

士師記の記者は、さりげない一文を加える。「参孫の髪は再び伸び始めていた。」その奉獻の象徴は裏切りの中で切り落とされたが、時が経つと戻ってきた。髪そのものに力はなかったが、それは彼の誓いのしるしであり、誕生前に与えられた召しの印であった。参孫が数々の方法でその誓いを破ったとしても、そのしるしは彼に戻った。神の取り消すことのできない召しは、人間の失敗によって断ち切られることはない。

その小さな記述は、牢獄における憐れみのささやきであった。ペリシテ人は気づかなかったが、天はそれを見ていた。世の人々にとって参孫は回復不能なほど打ち砕かれていたが、見えないしるしはその逆を証言していた。神がご自身の民を懲らしめる時でも、契約を取り消すことはない。イスラエルは捕囚に送られたが、預言者たちは帰還を約束した。ペテロはキリストを否認したが、教会を導く者として回復された。同じように、参孫は盲目のままガザで石臼を挽きつつ、神がまだ彼と共におられる証拠を頭に頂いていた。

参孫の髪とペリシテ人の偶像との間には、鋭い対照があった。彼の髪は再び伸びたが、偶像は何一つ回復させることができない。不信者に裁きが下る時、そこに回復はない。大袈は手足を再生させることも、神殿を建て直すことも、死人をよみがえらせることもできない。ただ生ける神だけが、罪が破壊したものを回復させるのである。参孫の髪は、神の約束が人の失敗よりも長く続くことを示すしるしであった。

つまりクリスチャンは、このことを思い起こす必要がある。多くの人は重大な罪の後で絶望し、自分の神の計画における位置が永遠に失われたと思い込む。自分は捨てられ、失格となり、希望がないと想像する。しかし神が呼ぶ時、その賜物を取り消すことはない。懲らしめは厳しいことがあるが、それは滅びではない。ペリシテ人が参孫を嘲笑した時、イスラエルの神は彼らを嘲笑う準備をしておられた。彼らのあざけりの下で密かに育っていたものこそ、到来する裁きのしるしであった。

ペリシテ人の首領たちは大祭を開くために集まった。彼らは大袈の神殿に集まり、いけにえをささげ、賛美の歌を歌った。彼らの叫び声は石の壁に響いた。「我らの神は参孫を我らの手に渡した。」群衆が膨れ上がると、彼らは繰り返した。「我らの神は、この地を荒らした敵を我らの手に渡した。」彼らが大袈の勝利と考えたものは、実は主の御旨であった。ペリシテ人は参孫の捕縛を自分たちの神の勝利だと見たが、神は彼らを一か所に集め、裁きの場へと導いていた。神は彼らをまさに望む場所に置いておられた。

神殿は広大で、巨大な石柱によって建てられていた。中庭には数千人が入り、屋根の上にもさらに数千人が立つことができた。空気は香の煙と礼拝者の叫びで満ちていた。首領たちは前列に立ち、誇りに酔い、偶像礼拝に酔いしれていた。群衆は熱狂し、大袈がイスラエルの神にできなかったことを成し遂げたと信じ込んでいた。それは民族的な誇りの祭りであり、その頂点に参孫の辱めが置かれていた。

祭りの叫びは響き渡った。すべての心は大袈への誇りで膨れ上がり、すべての声は勝利を誇った。偶像礼拝は常にこのように働く。神の民がつまずくと、世界は自分たちの偶像を指して「やはり正しかった」と主張する。信者が妥協するたびに、異教の誇りは強まる。彼らにとって参孫の恥辱は、イスラエルの神の恥辱であった。そして彼らは喜びに満ちた。

彼らはさらに求めた。群衆は参孫本人を要求した。首領たちは彼を牢から連れてくるよう命じた。参孫は少年に導かれ、盲目のままつまずきながら進んだ。その姿を見ただけで群衆は大笑いした。かつて彼らを震え上がらせた男が、今や弱さゆえに嘲られていた。「参孫を出せ、我らを楽しませろ」と叫び、彼は群衆の真ん中に置かれた。彼らの娯楽が、参孫の舞台となった。彼らは自分たちの勝利を誇示しているつもりでいたが、神は彼らの滅びを準備していた。

参孫は彼を導いていた少年に言った。「神殿を支える柱に触れられるよう、私をその所へ導いてくれ。そこにもたれたいのだ。」少年はその通りにした。何が起こるかなど、想像もできなかった。祭りの喧騒が彼らを包み、いけにえのにおいが空気に漂った。ペリシテ人の首領たちは前列に立ち、屋根の上には群衆が溢れていた。参孫は大袈裟の神殿の柱の間、首領たちすべての前、国中が見守る中、神が意図されたまさにその場所に立っていた。

そして参孫は祈った。ことばは少なかったが、彼の生涯の重みが込められていた。「主なる神よ、どうか私を覚えてください。どうか今一度だけ力を与え、私の両目の報いを一撃で返させてください。」彼はもはや、レヒで叫んだ時のように神に要求する態度ではなかった。かつて彼は「私は渴きで死なねばならないのか」と不満を叫んだ。彼には確信があったが、軽率で、自分の権利であるかのように神の賜物を扱っていた。今の彼は敬意をもって語り、神を統治者として呼び、依存を告白し、自分を覚えてほしいと願った。

「私を覚えてください」という言葉は、神の民の歴史の中で深い意味を持っていた。ハンナは「主よ、どうか私を覚え、男の子をお与えください」と祈った。ネヘミヤは「わが神よ、どうか私を良しとして覚えてください」と叫んだ。十字架の強盗は「イエスよ、あなたが御国に来られる時、私を思い出してください」と願った。神に「覚えてください」と求めることは、神が忘れていないのではないかと恐れることではなく、神の契約の真実を呼び求める行為であった。参孫も同じ心で祈った。神が自分を捨てていないと信じたからこそ、もう一度力を求める勇気を持つことができたのである。

これは臆病な祈りではなかった。盲目で、縛られ、嘲られながら、自らの腕で石の神殿を倒すという超自然的な力を求める祈りであった。参孫は自分の特権意識を失ったが、信仰は残っていた。今や大胆さと敬虔さが彼の心で一つとなっていた。敬虔さのない大胆さは彼を無謀にし、信仰のない敬虔さは敗北の中で沈黙させたであろう。この後者の姿こそ、今日自称クリスチャンの大多数が示している偽りの敬虔である。しかし参孫には両方があった。彼の信仰は練られ、最後の祈りは彼の人生で最も高い献身の行為となった。

敬虔と大胆さの結合は、真の祈りの本質を示す。信仰は恐れて身をすくめることはしないが、神の約束を軽々しく扱うこともない。神の言葉を信じるゆえに大胆に願い、神の聖を敬うゆえに謙虚にひれ伏す。多くの者は一方に偏る。大胆さのない祈りは、控えめ

で可能性の範囲を超えようとしな。敬虔さのない祈りは、神を当然のように扱う。信仰のない者ほど前者を弁護し、自分を正当化するために参孫を非難する。しかし二つのうちで神が喜ばれるのは後者であり、ゆえに参孫は一生を通して神に弁護され、聖書において義とされた。参孫は長く誤った態度の中にあったが、最後の瞬間にその信仰は純化された。彼は人間には不可能なことを願い、神がそれを成し得ると確信し、主の御前に低くなって求めた。

参孫は柱に両手を置いた。盲目で、嘲られ、敵に囲まれながら、召された神への全面的な信頼を置いた。「私はペリシテ人と共に死にたい」と言い、押し始めた。神の霊が彼に臨み、石は動き始め、基礎は揺れ、屋根は三千人の重みで震えた。最後の力が彼から発せられると、神殿は崩れ落ちた。首領たちは押しつぶされ、民は自らの祭りの瓦礫の中に葬られた。彼らが賛美した神には、彼らを救う力がなかった。大袈の神殿は、その礼拝者の墓となった。

記者はこう付け加える。「彼が死んだ時に殺した者は、生きていた時よりも多かった。」彼の最後の行為は、彼の生涯すべてを上回った。これは絶望からの自殺ではなく、信仰からの献身であった。参孫はイスラエルの救いを始めるために生まれ、その死をもってその召しを完成した。神は参孫の最後の息が最大の勝利となることを定めていた。ガザでの恥辱は、ペリシテ人への裁きの時となった。弱さの中に力が現れ、死の中に勝利が生じた。

家族は彼の遺体を回収し、父の墓に葬った。記録はこう結ばれる。「彼は二十年間イスラエルをさばいた。」この結びの一句は、彼の生涯への神の承認の印である。失敗によって消し去られることなく、彼の生涯は信仰によって冠を受けた。デリラの恥は遠ざかり、大袈の神殿の崩壊が彼の決定的な行為となった。聖書はその勝利を記憶し、彼を信仰者の列に加えている。

信仰は失敗より強い。参孫は情熱的で、向こう見ずで、愚かであったが、信仰は彼の内に残っていた。神の懲らしめが彼の高慢を削ぎ、敬虔さと大胆さを結び合わせた。彼は内面を見つめることを強いられ、かつて以上に神を見つめた。弱さの中で彼は神の力に全面的に寄りかかり、肉体的にも霊的にもかつてないほど強くなった。死によって彼は生涯以上のことを成し遂げた。だからこそ聖書は、彼が信仰によって承認を得たと言うのである。

参孫の死はイエス・キリストを予表している。参孫が両腕を伸ばして柱に押し当てたように、キリストは両腕を伸ばして十字架につけられた。参孫が死によってペリシテの首領たちを滅ぼしたように、キリストは死によって闇の支配者たちを武装解除した。参孫の死が彼自身の目の報いであったように、キリストの死は盲人の目を開いた。参孫が死によって生涯以上の多くを成し遂げたように、キリストは死によって無数の者を救い、その救いは生涯の働きだけでは達し得なかったものであった。参孫の死は裁きをもたら

し、キリストの死は救いをもたらした。参孫が最後の時に信仰で記憶されたように、キリストは信仰の創始者であり完成者として永遠に崇められる。

対照は類比と同じほど教訓的である。参孫が罪のために縛られたように、キリストは私たちの罪のために縛られた。参孫が欲望に従ったために目を失ったように、キリストは神の御旨に従ったために顔を打たれた。参孫の死が偶像の神殿を倒したように、キリストの死はサタンの力を打ち砕いた。参孫が敵の瓦礫の中に倒れたのに対し、キリストは墓からよみがえり、再び死ぬことはない。参孫はイスラエルを部分的にしか救えなかったが、キリストは一度限りで永遠の贖いを成し遂げた。参孫は影を指し示したが、キリストはそのすべての影と預言を成就された。

神は参孫を、アブラハム、モーセ、ダビデ、預言者たちと共に置く。彼に信仰があったからである。世界は彼に値しなかった。参孫は孤独で、誤解され、嘲られた。両親は彼を理解せず、愛した女たちは彼を操り、同胞は彼を裏切り、今日のクリスチャンでさえ彼を軽んじる者は多い。しかし神は彼を認められた。彼の信仰は最後まで続き、彼は死によって召しを成し遂げた。彼の物語は、私たちにも同じことを求めている。すなわち神の力と憐れみに確信を置き、神の聖を恐れ、神の目的が失敗することは決してないと確信して生きることである。

9. キリストの影

ヘブル書十一章は、参孫を情欲やデリラのために記憶するのではなく、信仰のゆえに記憶する。神の記録は、王国を征服し、軍勢を打ち破り、神の承認を得た者たちの中に彼の名を置く。世界は彼にふさわしくなかった。これは神の判定であり、彼の敵の嘲笑にも、批評家たちの歪曲にも逆らって立つ。多くのクリスチャンは、彼の生涯を警告話に縮めたり、あたかも失敗だけで構成された物語であるかのように哀れみの目で見ると見る。しかし神は、彼の名を愚か者の索引ではなく、信仰者の殿堂に記した。最後の言葉は神のものであり、最後の言葉は信仰である。

これは取るに足らぬ問題ではない。神の裁きを退ける者は、自分を神の上に置く。神は、参孫がアブラハム、モーセ、ダビデ、預言者たちと同じ息づかいで称賛された信仰の人であると言われる。御霊は、彼の名を永遠に信仰者の記録に刻んだ。これが天の判決である。人が参孫を批判し、嘲るとき、彼らは一人の人間を誤って評価しているだけではなく、神に逆らっている。問題は、彼らが参孫について誤っているかどうかではなく、彼らが自らの本能より神の言葉に服するつもりがあるかどうかである。参孫への軽蔑は、実際には聖書そのものへの軽蔑である。

参孫の生涯は風刺によって曇らされてきた。彼は放縦だと非難されるが、実際には孤独であった。両親は彼を理解せず、妻は裏切り、同胞は彼を見捨て、敵は彼を追い立てた。後の世の人々が彼を振り返る時、彼らは彼の罪と失敗だけを見て、彼の全存在が無駄であったかのように語る。しかし神は逆のことを言われる。彼の孤独は堕落の証拠ではなく、忠実の証拠であった。周囲が安逸と妥協を選んだ時、彼は神に忠実であった。彼の孤独は、彼が民を捨てたからではなく、民が彼を捨てたからであった。最後には、この孤独こそが彼の力の冠であり、恥ではなかった。

参孫が独りで行動したという非難は、実際には彼への最大の賛辞である。彼の同胞は服従を紛争よりも選んだが、彼は繰り返し敵を打った。彼らは彼を縄で縛り、圧制者に渡したが、彼は神を信頼し、ただ一人歩んだ。彼の孤独は群衆を咎める。彼が忠実であった時、彼らは忠実でなかったからである。この点において、彼はイエス・キリストを予表した。キリストもまた、友に見捨てられ、最も近い者に裏切られた。参孫の孤独は失敗ではなく、伴侶なきまま生きる信仰であった。彼が孤立したのは、彼自身の罪のためではなく、世界の罪のためであった。

この型は参孫に限られない。エリヤはカルメル山で数百の偽預言者に対峙し、イスラエルは二つの意見の間で揺れ動いた。エレミヤは主の言葉を語ったが、同胞は彼を井戸に投げ込んだ。預言者たちはしばしば独りで歩み、救うために遣わされた民に軽蔑された。しかし参孫の状況はさらに鋭い。エリヤにはバアルに膝をかがめなかった残りの者がいた。エレミヤには彼の言葉を書き留めたバルクがいた。しかし参孫には誰もいなかった。民は彼を縛り、ペリシテ人に引き渡した。国全体が信仰ではなく隷従を選んだ。彼

の孤独は完全であったが、それでも彼は敵を打った。彼の信仰は、完全な孤独の中でそびえ立った。

彼の効力の大きさは無視できない。軍勢も、味方も、自国民の支援もなく、参孫はペリシテ人の力の全ての柱を打った。彼は畑を焼き、ぶどう畑を滅ぼし、兵士を殺し、城門を引き抜き、神殿を崩した。農業、経済、軍事、政治、宗教、その全てが一人の信仰者によって崩れた。イスラエルの軍は一度も彼と共に立ち上がらなかったが、それでも彼は敵の背骨を折った。現代の教会は共同体や制度を誇り、霊的な力が数にあるかのように語るが、五千の団体が集まっても、信仰によって参孫が成し遂げたことに及ばない。一人の信仰者は、妥協する群衆よりも闇の力にとって脅威である。

彼は彼らの収穫を破壊し、経済を打った。彼は兵士を殺し、軍事力を砕いた。彼は支配者を辱め、弱さを暴いた。彼はガザの城門を引き抜き、安全と誇りを奪った。彼は神殿を倒し、宗教の中心を砕いた。ペリシテ人の生活の全領域—経済、軍事、政治、宗教—が、一人の神を信じる者によって揺らいだ。これは無秩序な暴力ではなく、目的なき力の誇示でもない。一人の信仰者を通して行われた神の精密な裁きであった。彼の信仰は敵を破壊したが、それは神の計画を建てるためであった。

イエスもまた、理解しない人々に囲まれていた。弟子たちは口では告白したが、逮捕の時には逃げた。最も彼を愛した者でさえ、一時間共に目を覚ましていられなかった。イエスは言われた。「あなたがたは私を残して散って行く。しかし私は独りではない。父が共におられるからである。」これが決定的な違いであった。参孫は神の力を引き出す信仰を持っていたが、最後の時まで神との絶えざる親密さを欠いていた。イエスは父との完全な交わりの中に生き、揺らぐことなく、離れることもなかった。参孫は理解されない時に弱くなったが、イエスは全ての者に見捨てられても、父との交わりの中に力を見いだした。参孫がつまずいた所で、イエスもまた独りであったが、神との交わりの中で立ち続けた。

それでも、参孫の信仰は私たちに驚かせるほどの高さに達した。失明し、束縛され、辱められ、嘲笑されても、彼は再び神が聞かれると信じた。視力も、武器も、味方も、自由もなかったが、それでも神の善意と寛大さを信じた。彼の生涯最大の奇跡は、彼の復活的信仰であった。ほとんどの人はこのような状況で絶望し、自分の物語は終わったと考える。しかし参孫は、神の恵みは尽きておらず、自分の召しは撤回されておらず、どん底においても神は回復できると信じた。これは復活の型であり、しかも完全な聖さを生きた者ではなく、参孫のような者によって表現されたことで、いっそう鮮明になった。

この信仰の偉大さは誇張しようにもできない。これほどの破滅の後に神を信じ、赦しだけでなく完全な勝利を求めて信じることは、全く独自である。多くのクリスチャンは聖書全体を持ちながらも、ここまで信じることができない。参孫はそれなしに信じた。そして彼の最後の信仰は、彼をキリストの型としただけでなく、主がもたらす贖い—悔い

改め、信仰、力―を体現する弟子とした。しかも参孫はこれを独りで行った。深い罪に落ちたダビデでさえ、彼ほど辱められず、無力にもならず、友や預言者の支えがあった。参孫は何もなく、この信仰を持った。神が彼をこれほど尊ばれるのも当然である。彼の最後の行為は、腕の力だけでなく、絶望に対する信仰の勝利であった。

彼は賜物を浪費し、誓いを破り、女に裏切られ、敵に嘲られ、目をえぐられ、奴隷となり、家畜のように粉を挽かされた。彼はイスラエルで最も低い者、敗北の象徴となった。その穴から、彼は赦しだけでなく勝利を信じた。彼の最後の信仰は、それまでの全ての偉業よりも輝いている。獅子を裂き、城門を引き抜くには力が必要だったが、神がなお自分を愛し、なお自分を通して働かれると信じるには、さらに大きなものが必要だった。だからこそ、彼の最後の行為は最も輝く。神の力だけでなく、神の憐れみを信じたからである。

彼の最後の祈りには、彼の生涯で欠けていたものが現れた。以前の彼は、横柄で軽薄な態度で神に語った。レヒでは「私は今、渴きで死なねばならないのですか」と叫び、不満を述べるだけで礼拝しなかった。不満を述べながら奇跡を期待したため、神はそれでも彼の信仰に応えた。しかしガザでは、盲目にされ、へりくだり、「主よ、私を覚えてください」と言い、主の恵みと忠実さに訴えた。彼は神を信じただけでなく、神を理解し、神を尊んだ。信仰と親密さが一つになった。彼は力を求めたが、それは横柄でも権利意識でもなく、依存によるものであった。参孫の信仰は交わりへと成熟した。かつて軽率であった者が敬虔になった。彼の祈りは、孤独がついに神との交わりへと変わったことを示した。彼は疎外された者ではなく、和解した者として死んだ。生涯で完全にそうならなかった「神の友」として死んだのである。

参孫の欠点是否定できない。それらは物語の一部として立っている。しかしそれらは単なる欠点ではない。より大きな啓示の不可欠の一部である。アブラハムはハガルを取った。ヤコブは欺いた。モーセは岩を打った。ダビデはバテシバと罪を犯し、ソロモンは偶像に傾き、参孫は操られるままになった。彼らは皆信仰を示したが、皆失敗した。どれほど賜物に満ち、どれほど忠実に見えようと、誰一人としてメシアとなるには不十分だった。神は歴史の中で神学を書いておられ、その言葉は彼らの生涯によって書かれた。彼らは皆救い主の型であったが、皆その基準に届かなかった。こうして神は、真の救い主はご自身、イエス・キリストだけであると世界に教えられた。

アブラハムは信仰の父であったが、ハガルを取り、約束を人の努力で得ようとした。モーセは神と顔と顔を合わせて語ったが、怒りによって命令に背き、約束の地に入れなかった。ダビデは神の心にかなう者であったが、姦淫と殺人に堕ちた。参孫は胎内から聖別されたが、賜物を浪費し、デリラによって倒れた。彼らは皆偉大であり、皆欠けがあった。そして皆、前方を指し示した。歴史によって神が書いたのは、どの人間も救い主にはなれないということである。世界はより偉大な救い主を必要とした。それゆえ神の御子が来られた。キリストだけが完全な人、真のイスラエル、最終の勇士である。

教会はこれを聞かなければならない。奇跡のために信仰を追い求めながら、神との親密さを軽んじる者がいる。参孫は、その行き着く先を警告する。しかしはるかに多くの者が、神との親密さを求めると言いながら、奇跡を求めることも信じることも決してしない。彼らの主張は偽りである。神の業への信仰なしに、神との真の親密さはない。力を拒否しながら神との交わりを語るのは、愛や真理を拒みながら神に近いと言うのと同じである。神との真の交わりは、奇跡への信仰を必ず伴う。神を知るとは、奇跡の神を知ることである。聖書は言う。「諸々の神のうち、主よ、あなたに並ぶ者が誰か。あなたのように聖において威厳があり、誉れあるわざにおいて恐るべき方が誰か。」参孫の物語は、この二つの誤りを暴く。彼は力を持っていたが、親密さを欠き、弱くなった。教会は親密さを語るが力がなく、その主張が偽りであることが暴露される。唯一の道は、信仰と愛、確信と敬意、教理と奇跡を一つとして持つことである。それ以外は偽物である。

クリスチャンは、参孫の孤独を彼の罪だと誤解してきた。彼が独りで行動したのは向こう見ずで自己中心だと言う。しかし真実は明らかである。最初から両親は彼を理解せず、妻は裏切り、仲間は嘲り、同胞は彼を見捨てた。彼には軍がなかったが、それは誰も彼と共に信じなかったからである。そしてイスラエルは繰り返し偶像に倒れたが、参孫が偶像と妥協した記録は一つもない。むしろ彼は生涯、偶像崇拜者を打った。そして最後の行為は、彼らの神殿を引き倒すことであった。彼の孤独は彼らを咎めるのであり、彼を咎めるのではない。彼は彼らが臆病であった時に忠実であった。彼の孤立は反逆ではなく従順であった。彼の孤独を失敗として描くことは、彼を裏切った者たちの嘘に加わることである。彼は他の者が立とうとしなかったために、一人で忠実であった。これは弱さではなく偉大さである。

物語の頂点は、彼の罪ではなく、彼の信仰である。完全に失われた時に、彼は回復を信じた。敗北が総体となった時に、勝利を信じた。見捨てられたと思える状況で、彼は神の恵みを信じた。この信仰は、彼が以前に行った奇跡よりも偉大である。それは絶望に逆らう信仰、破滅の後の信仰、死に直面しての信仰である。だからこそ彼はヘブル書十一章に、アブラハムやモーセと並んで記されている。彼の生涯は、たとえ多くを浪費した者でも、信仰が残るなら神の承認を得ることを教える。彼の最後の祈りは彼の最良の瞬間であり、最後の行為は彼の最大の勝利であった。

このようにして参孫は、二つの遺産を残す。第一に、彼はキリストを予表する。彼は天使に告げられて誕生し、胎内から聖別され、御霊により力を受け、家族に理解されず、国民に裏切られ、敵に引き渡され、弱さの中で嘲られ、死によって勝利した。しかしキリストはこれを完全に成就し、罪なく、ペリシテ人ではなく死の力を滅ぼした。参孫の生涯は偉大であったが、さらに偉大な者を指し示した。彼の欠点は、どの人間もメシアになれないことを示した。神ご自身だけが救え、イエス・キリストにおいてそれを成し遂げられた。参孫の死はその影を示し、キリストの死はその実体を成就した。

第二に、参孫は力強く、同時に親密な信仰へと私たちを招く。彼は、交わりなき信仰は脆弱であり、信仰なき交わりは偽りであることを示した。彼は、孤独の中の信仰は恥ではなく栄誉であることを示した。彼は、神の善と憐れみを信じるなら、大きな失敗の後でも回復が可能であることを示した。

参孫の信仰——彼の神学と言ってもよい——は、神の民の中でも他に類を見ないほど独自であった。彼が他の者をあらゆる点で上回ったという意味ではないが、彼は他の者が持たなかった独自性を持っていた。彼の物語は、世の浅はかな批判を拒み、神の判決を信じるよう私たちに要求する。世界は彼にふさわしくなかった。彼は孤独であり、理解されず、嘲られた。両親に誤解され、愛した者に操られ、同胞に裏切られ、現代のクリスチャンにさえ侮られている。しかし神は彼を承認された。彼の信仰は最後まで残り、死の中で召しを成し遂げた。彼の物語は、私たちにも同じ歩みを呼びかける。神の力と憐れみを信じ、神の聖を敬い、神の目的が決して失敗しないことを確信して生きよう。